

Ⅱ 調査結果の概要

平成 29 年度の体力・運動能力に関する調査結果の概要は、次のとおりである。

1 年齢と体力・運動能力

(1) 各テスト項目の記録の加齢に伴う変化

各テスト項目の記録の加齢に伴う変化を図 1-1 から図 1-10 に示した。

図 1-1 から図 1-3 には、全年齢（6 歳から 79 歳）を対象とした、握力（筋力）、上体起こし（筋力・筋持久力）、長座体前屈（柔軟性）の結果を、図 1-4 から図 1-6 には、青少年および成年（6 歳から 64 歳）を対象とした、反復横とび（敏捷性）、20m シャトルラン（全身持久力）、立ち幅とび（筋パワー及び跳能力）の結果を示した。また、図 1-7 と図 1-8 には、青少年（6 歳から 19 歳）を対象とした、50m 走（スピード及び走能力）とボール投げ（筋パワー、投能力、及び巧み性）の結果を、図 1-9 には、中学生以上の青少年（12 歳から 19 歳）を対象とした持久走（全身持久力）の結果を、さらに図 1-10 には成年（20 歳から 64 歳）を対象とした急歩（全身持久力）を示した。

一般的傾向として、ほとんどの項目で男子の記録が女子の記録を上回ったまま成長とともに記録は向上を示し、女子が中学生年代でピークレベルに達するのに対して男子ではそれ以後も向上を続けて高校生年代から成人にかけてピークレベルに達する。ただし、握力は、男女ともに青少年期以後も緩やかに向上を続け 30 歳代から 40 歳代でピークレベルに達し、他のテスト項目に比べピークに達する年代が遅い。なお、いずれの項目においても男女ともに記録はピーク以後加齢に伴い直線的に低下していくが、低下の程度はテスト項目によって大きく異なる。

ア 握力

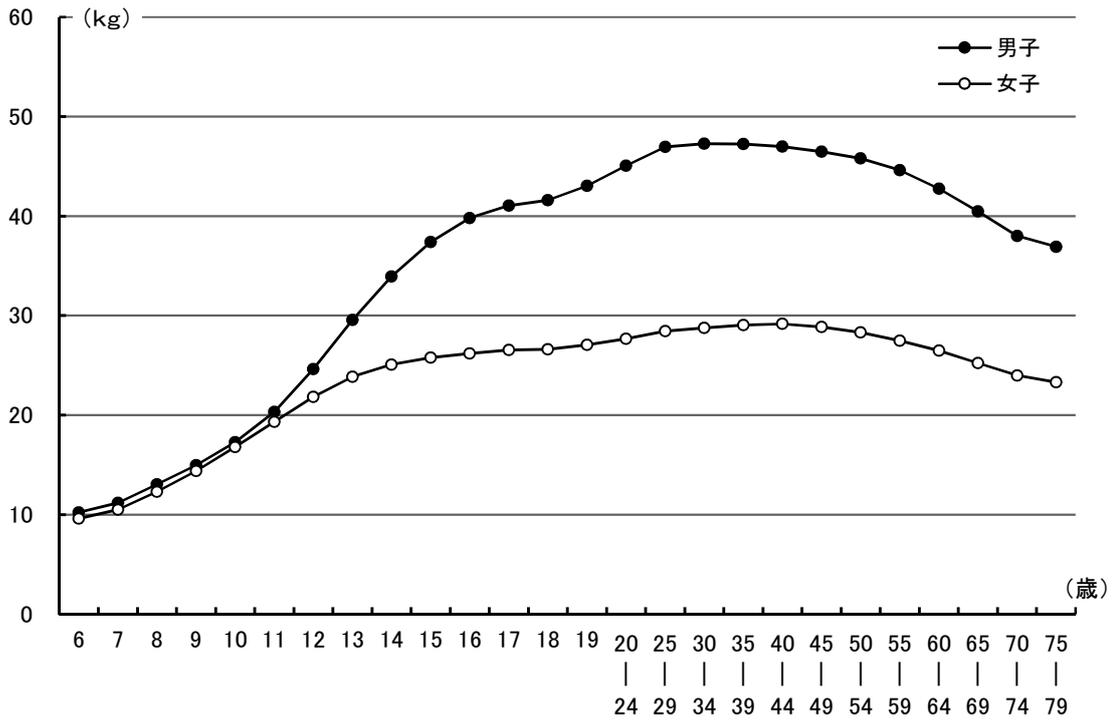


図 1 - 1 加齢に伴う握力の変化

(注) 図は、3点移動平均法を用いて平滑化してある。

イ 上体起こし

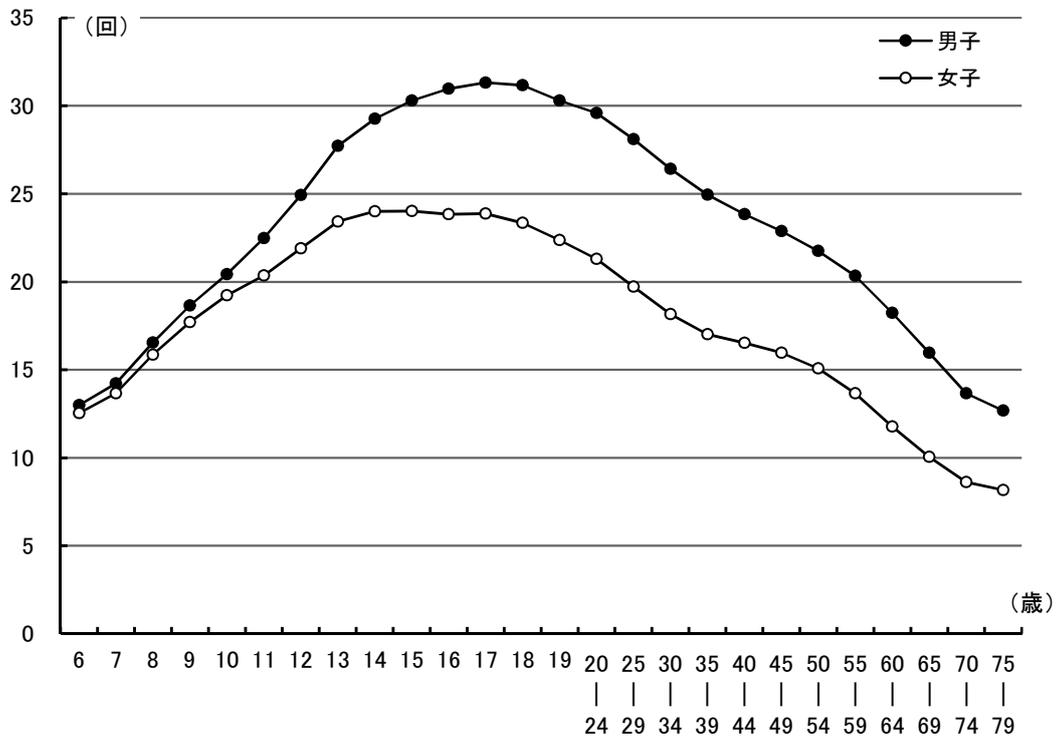


図 1 - 2 加齢に伴う上体起こしの変化

(注) 図 1 - 1 の (注) に同じ。

ウ 長座体前屈

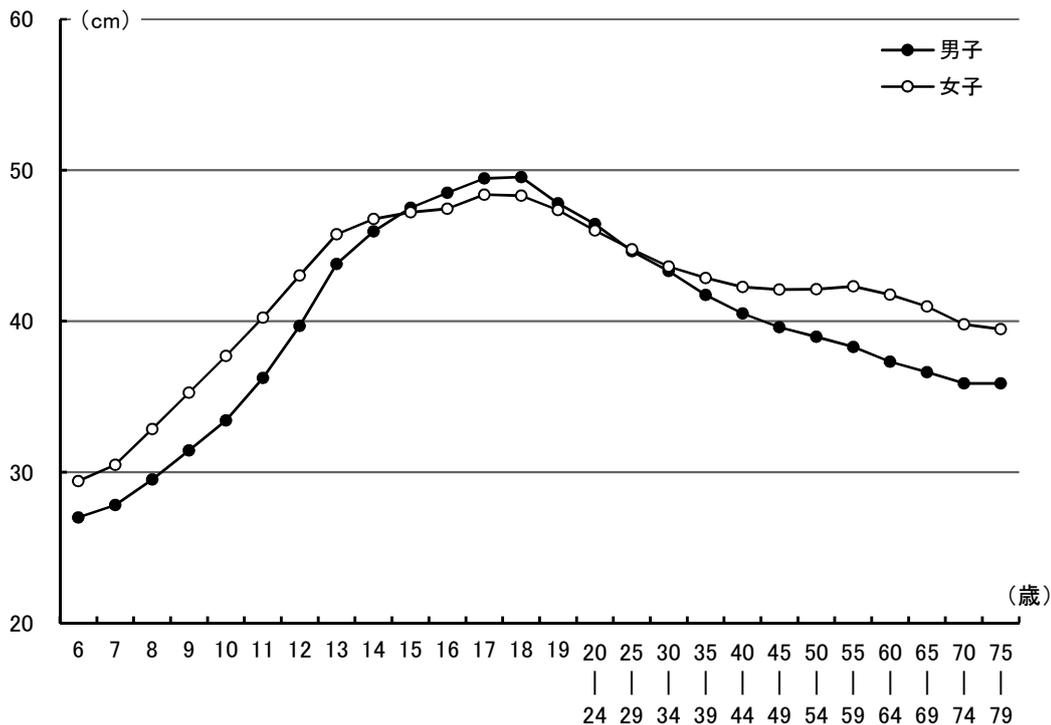


図 1 - 3 加齢に伴う長座体前屈の変化

(注) 図 1 - 1 の (注) に同じ。

エ 反復横とび

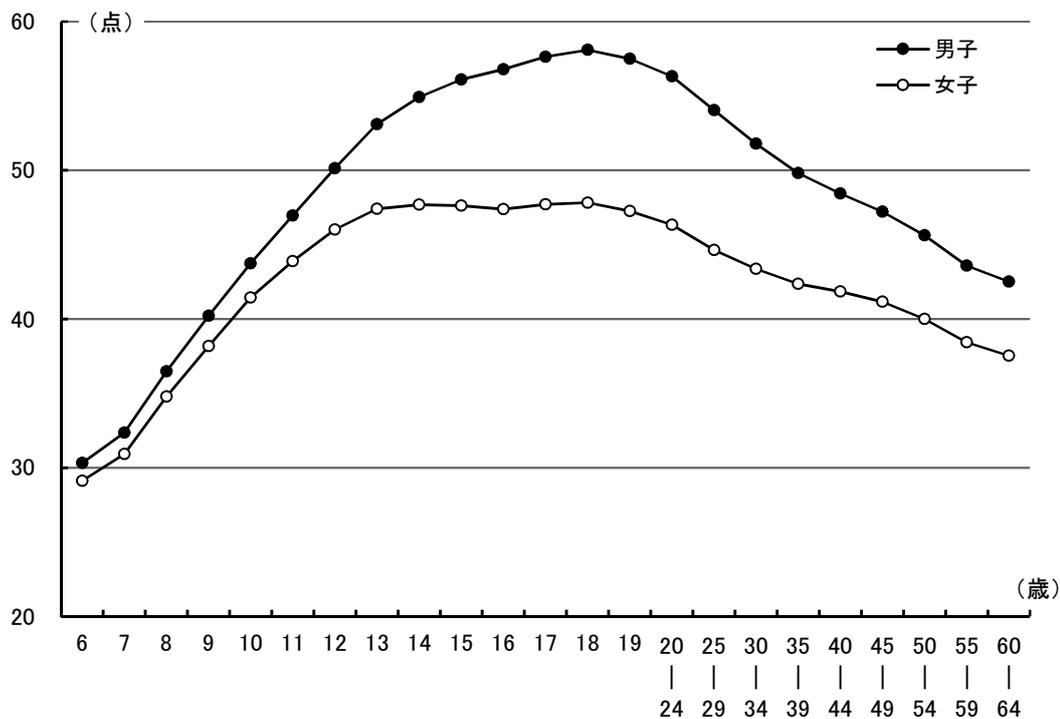


図 1 - 4 加齢に伴う反復横とびの変化

(注) 図 1 - 1 の (注) に同じ。

オ 20mシャトルラン（往復持久走）

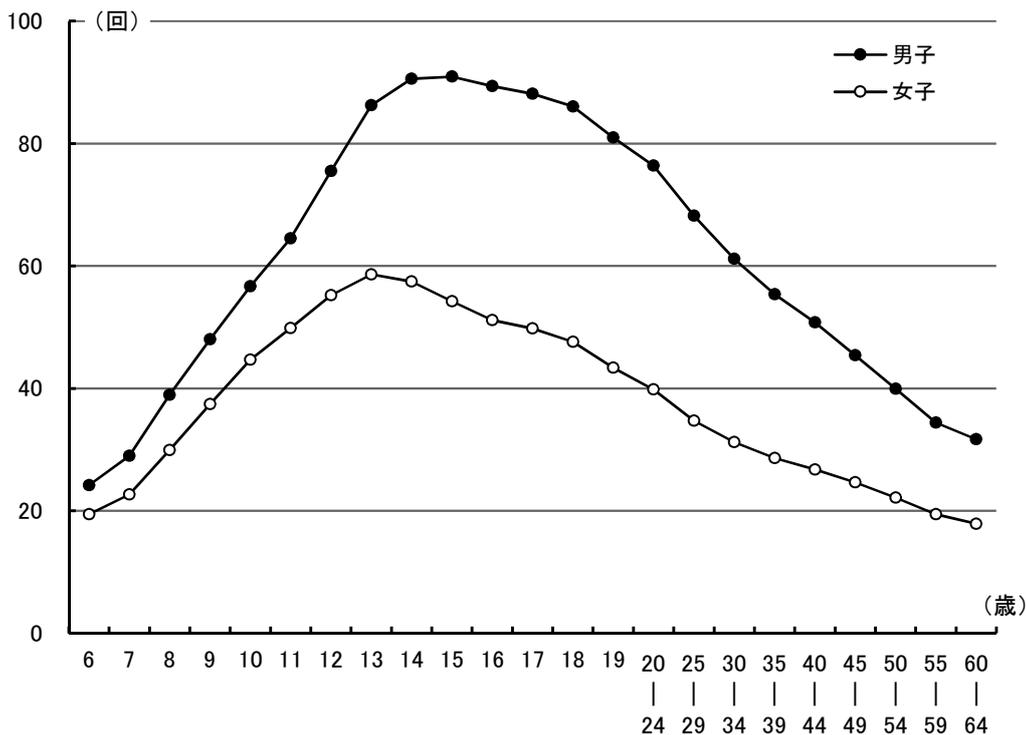


図 1 - 5 加齢に伴う 20mシャトルラン（往復持久走）の変化

(注) 図 1 - 1 の(注)に同じ。

カ 立ち幅とび

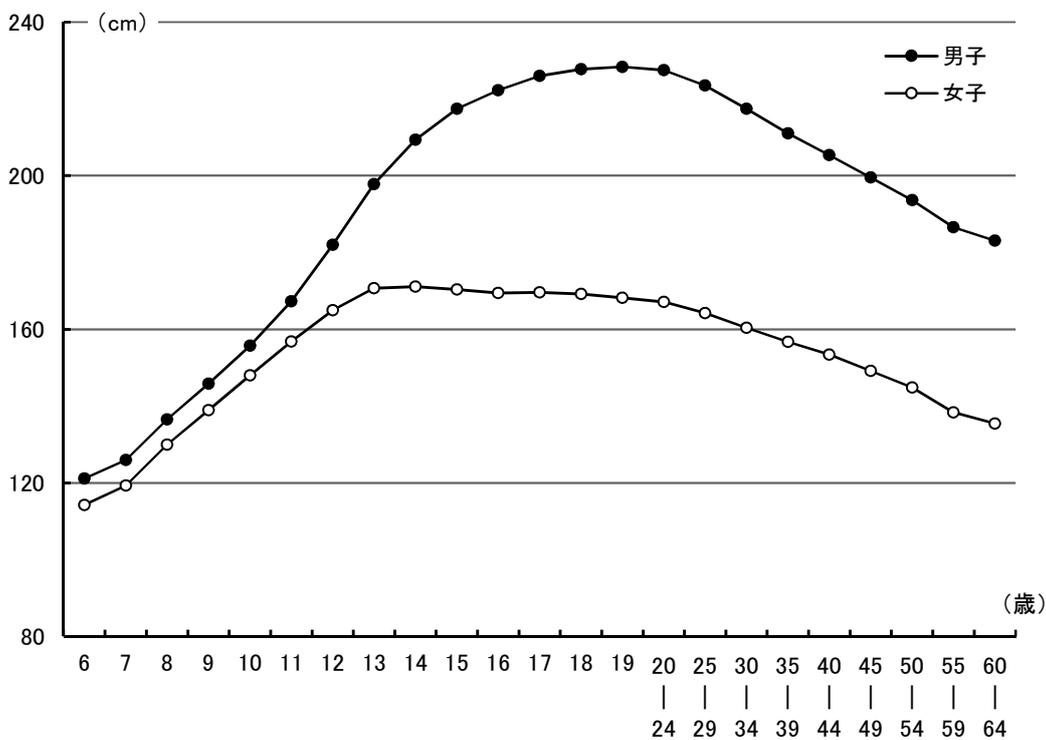


図 1 - 6 加齢に伴う立ち幅とびの変化

(注) 図 1 - 1 の(注)に同じ。

キ 50m走

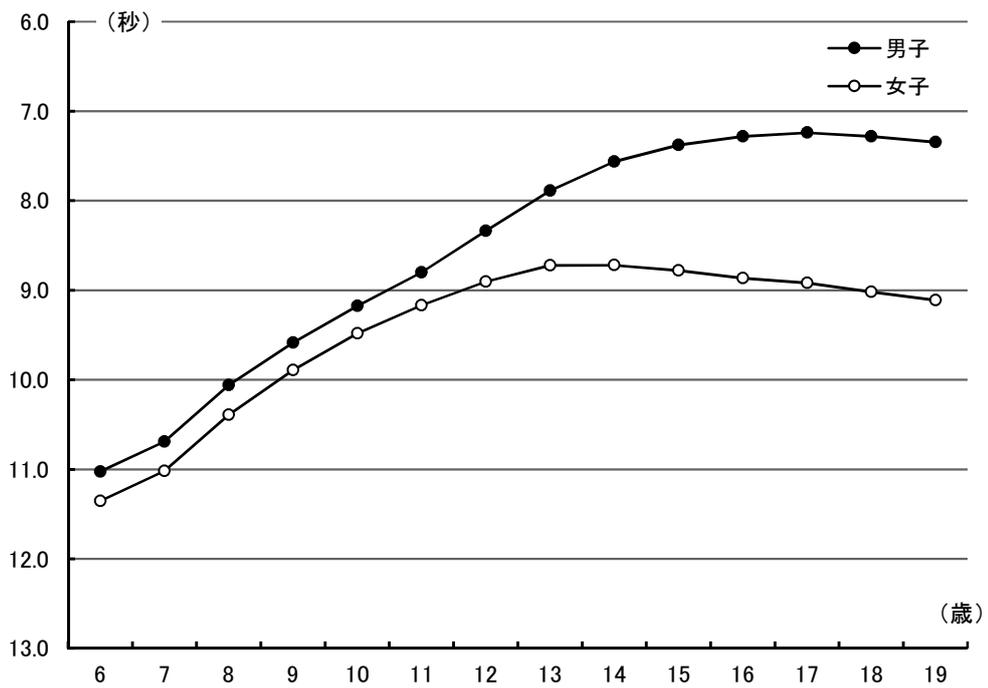


図 1-7 加齢に伴う 50m 走の変化

(注) 図 1-1 の(注)に同じ。

ク ボール投げ (ソフトボール投げ・ハンドボール投げ)

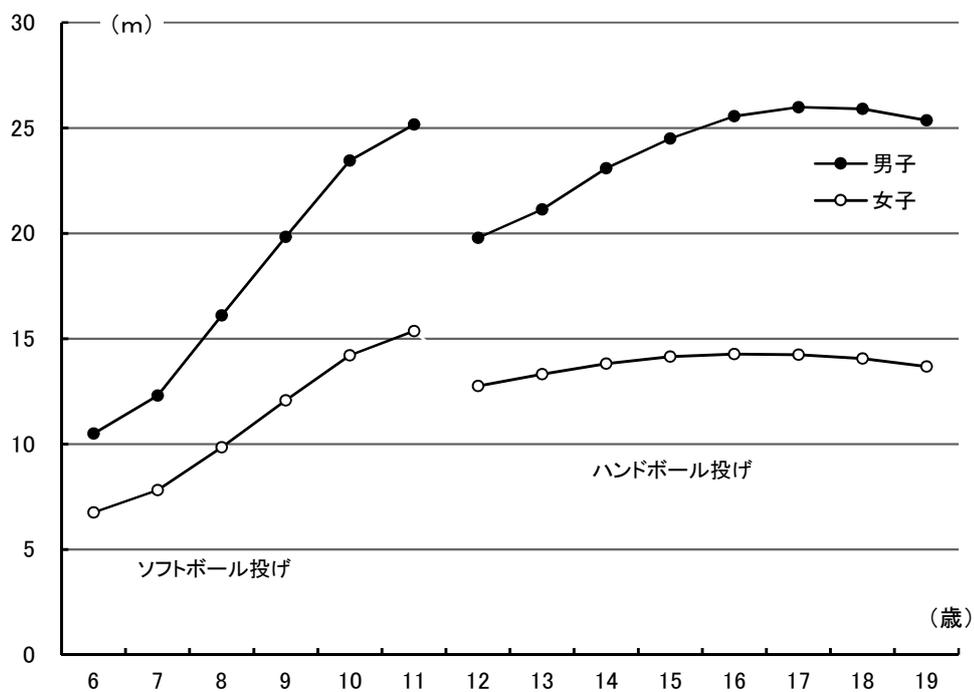


図 1-8 加齢に伴うボール投げの変化

(注) 図 1-1 の(注)に同じ。

ケ 持久走及び急歩

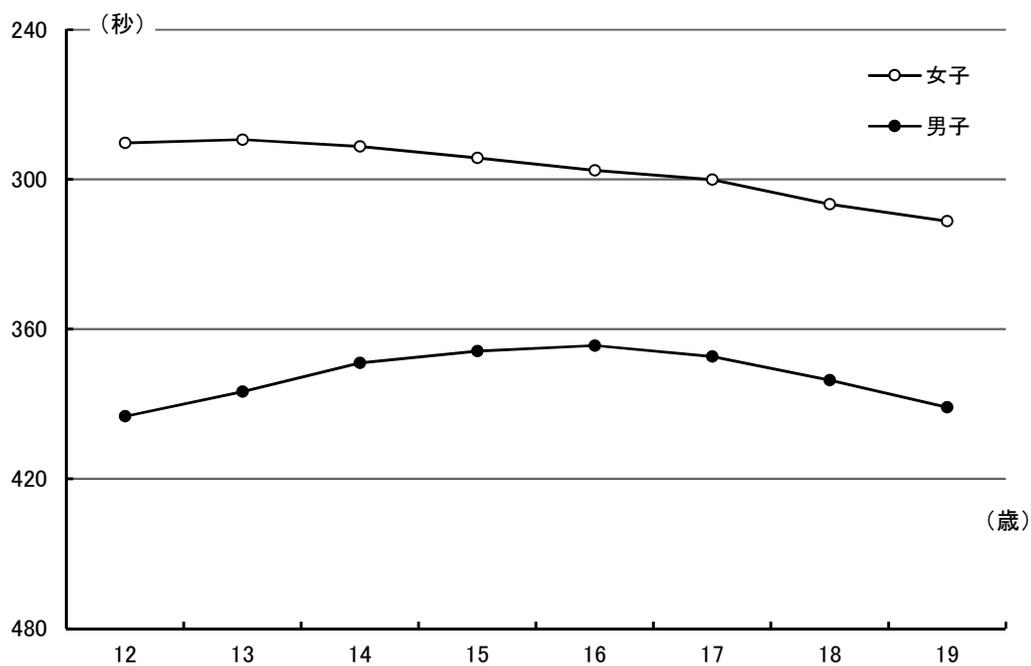


図 1-9 加齢に伴う持久走の変化

(注) 1. 図は、3点移動平均法を用いて平滑化してある。

2. 男子は 1,500m 女子は 1,000m

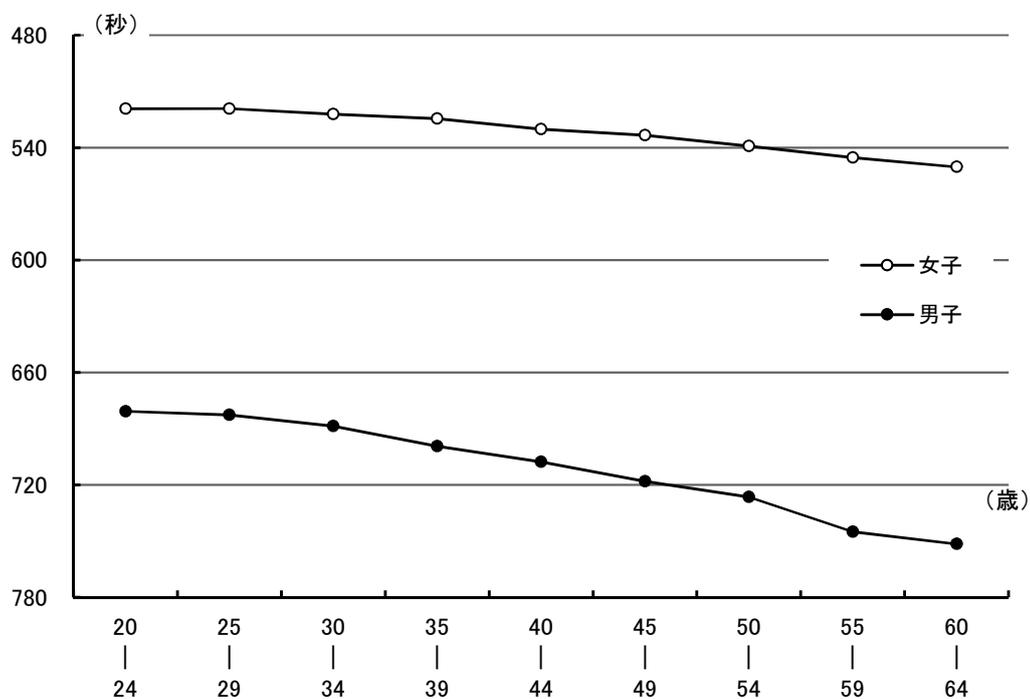


図 1-10 加齢に伴う急歩の変化

(注) 図 1-9 の (注) に同じ。

(2) 合計点の加齢に伴う変化

図 1-11 と図 1-12 には、体力・運動能力の総合評価の指標である新体力テストの男子および女子の合計点の加齢に伴う変化を各年齢段階別に示した。

新体力テストの合計点からみた小学生時の（6 歳から 11 歳）の体力水準は、男女とも加齢に伴い急激に向上する。中学生以上の青少年（12 歳から 19 歳）では、男子は 17 歳ごろのピークまで著しい向上傾向を示し、女子は 14 歳ごろのピークまで緩やかに向上する。成人期（20 歳から 64 歳）および高齢期（65 歳から 79 歳）では、男女ともに体力水準は加齢に伴い直線的に低下する。

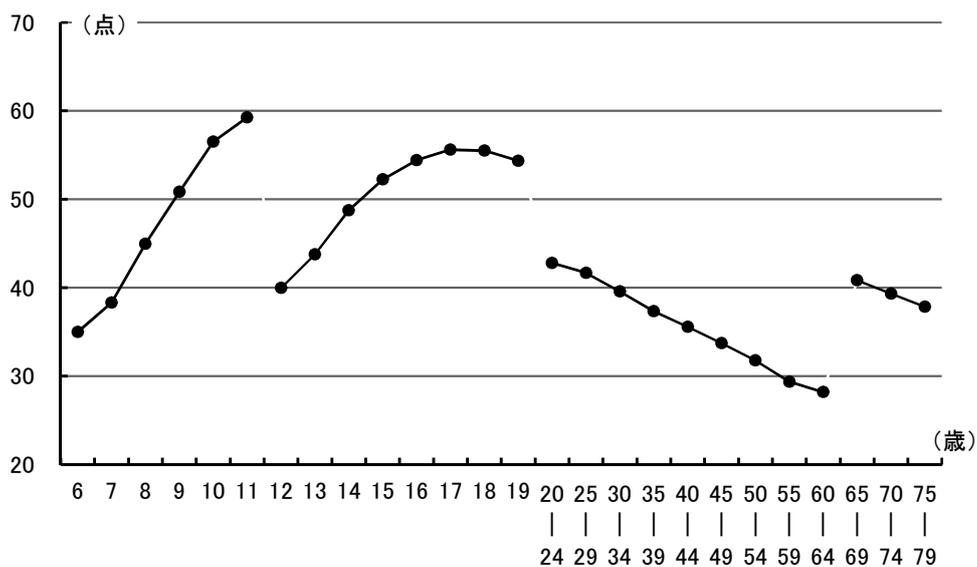


図 1-11 加齢に伴う新体力テストの合計点の変化（男子）

- (注) 1. 図は、3点移動平均法を用いて平滑化してある。
 2. 合計点は、新体力テスト実施要項の「項目別得点表」による。
 3. 得点基準は、6～11歳，12～19歳，20～64歳，65～79歳で異なる。

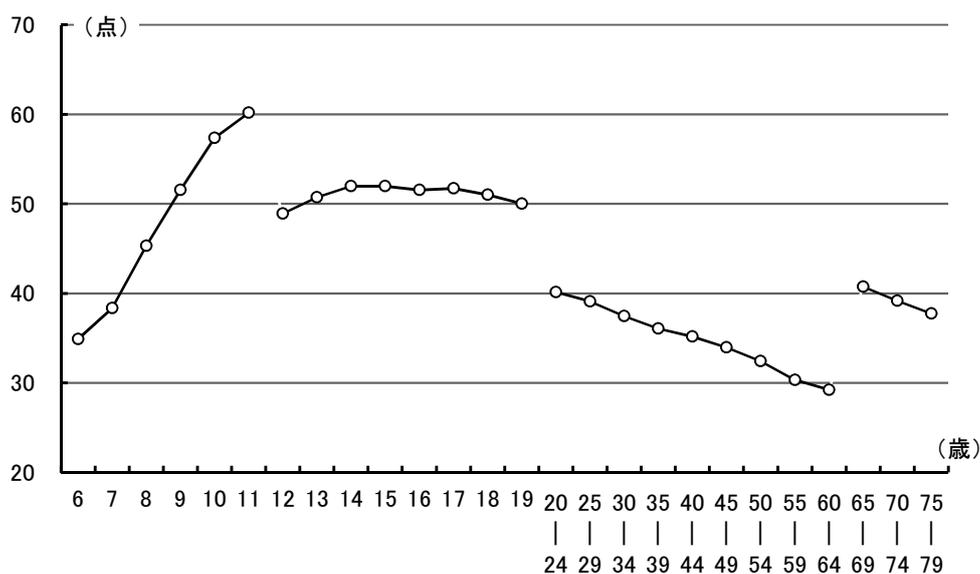


図 1-12 加齢に伴う新体力テストの合計点の変化（女子）

(注) 図 1-11 の(注)に同じ。

2 体力・運動能力の年次推移

(1) 青少年（6歳から19歳）

長期（50年以上）にわたる年次推移の観察が可能である，握力，50m走，持久走，立ち幅とび，ボール投げについて図 2-1 から図 2-10 に示した。また，新体力テスト施行以後 20 年間の年次推移の観察が可能である，上体起こし，長座体前屈，反復横とび，20m シャトルラン及び新体力テスト合計点について図 2-11 から図 2-20 に示した。

平成 29 年度の握力，50m走，持久走，立ち幅とび，ボール投げを，水準の高かった昭和 50～60 年頃と比較すると，中学生男子及び高校生男子の 50m走を除き，依然低い水準になっている。

最近 10 年では，男女のボール投げ及び高校生男子の握力において低下傾向にあるが，その他の項目では，男女及び年代によってやや違いが見られるものの，合計点を含みほとんどの項目では，横ばいまたは向上傾向を示している。

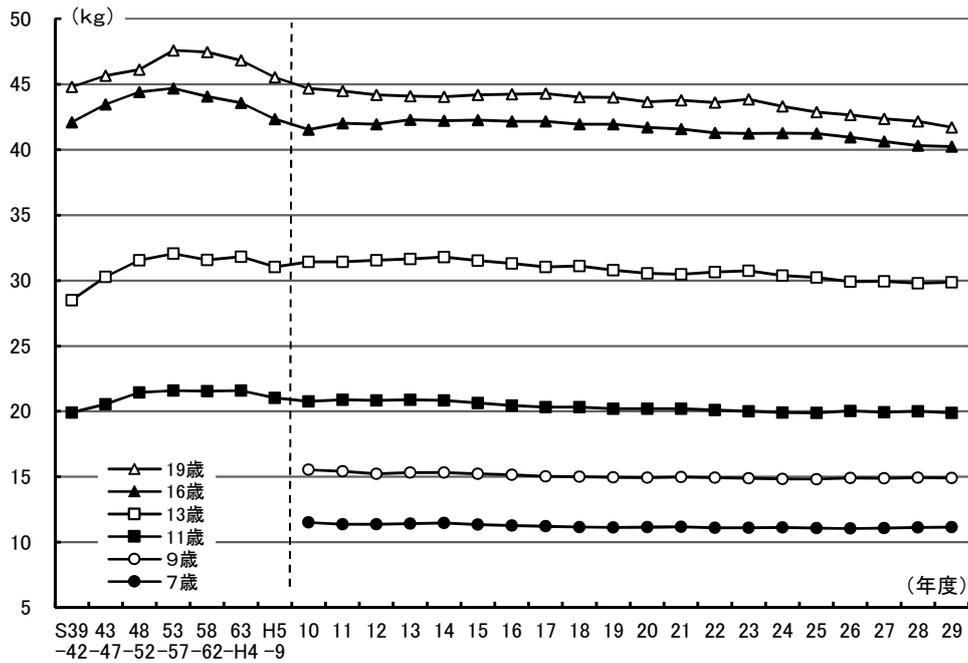


図 2 - 1 握力の年次推移（男子）

- (注) 1. 平成 9 年度までは示した期間中の平均値で表している。
 2. 平成 10 年度以降は 3 点移動平均法を用いて平滑化してある。

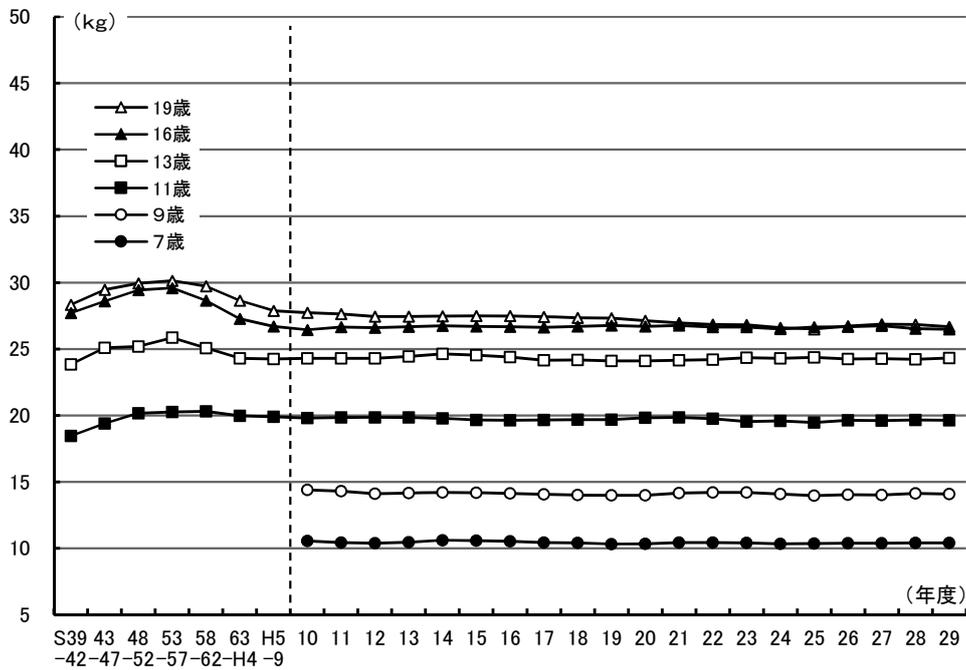


図 2 - 2 握力の年次推移（女子）

- (注) 図 2 - 1 の (注) に同じ。

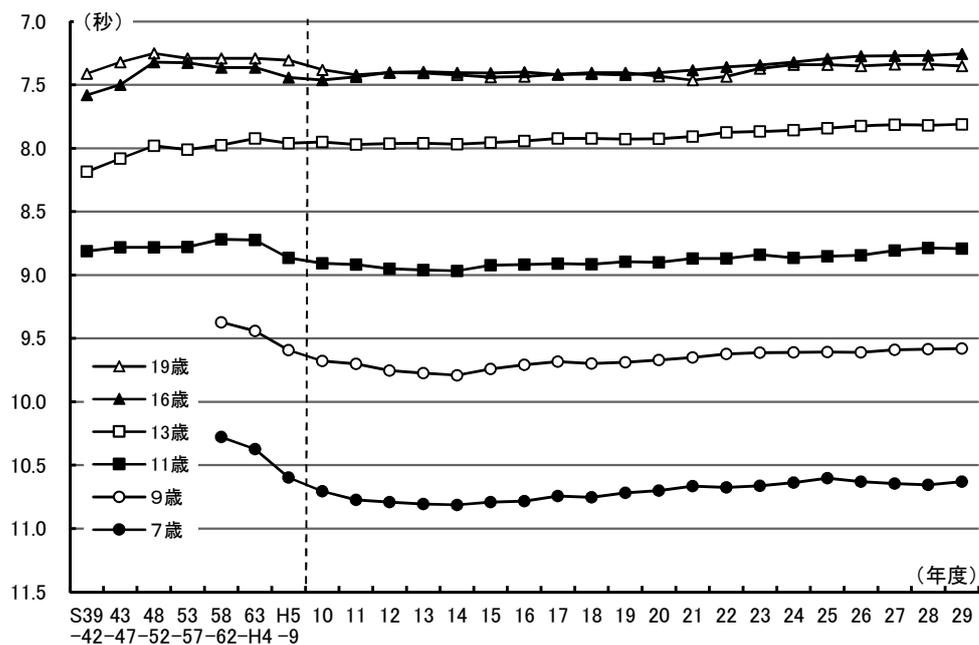


図 2 - 3 50m走の年次推移 (男子)

(注) 図 2 - 1 の (注) に同じ。

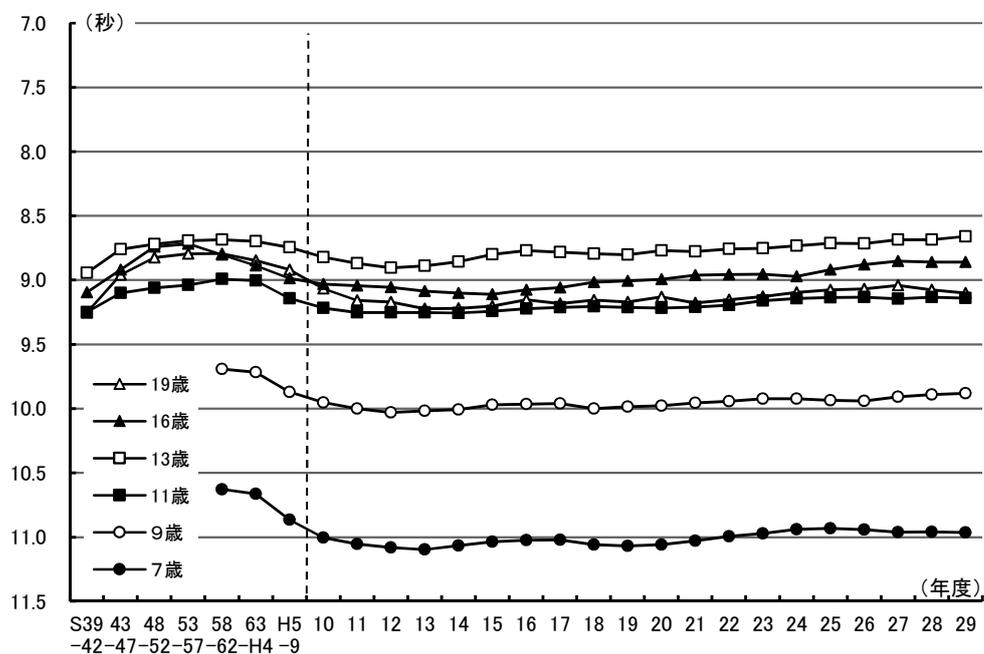


図 2 - 4 50m走の年次推移 (女子)

(注) 図 2 - 1 の (注) に同じ。

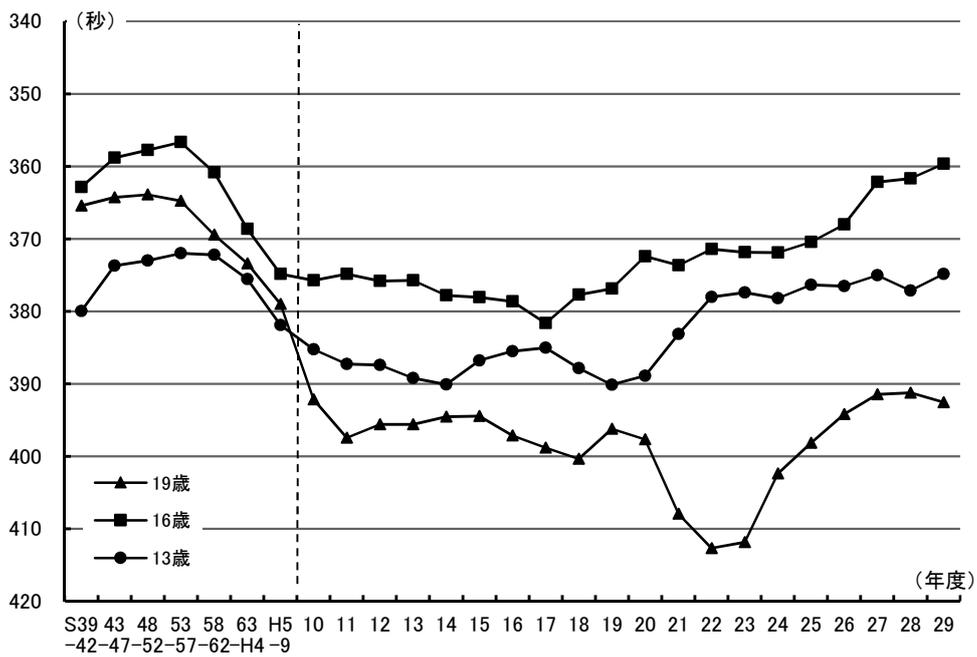


図 2 - 5 持久走（1500m）の年次推移（男子）

（注）図 2 - 1 の（注）に同じ。



図 2 - 6 持久走（1000m）の年次推移（女子）

（注）図 2 - 1 の（注）に同じ。

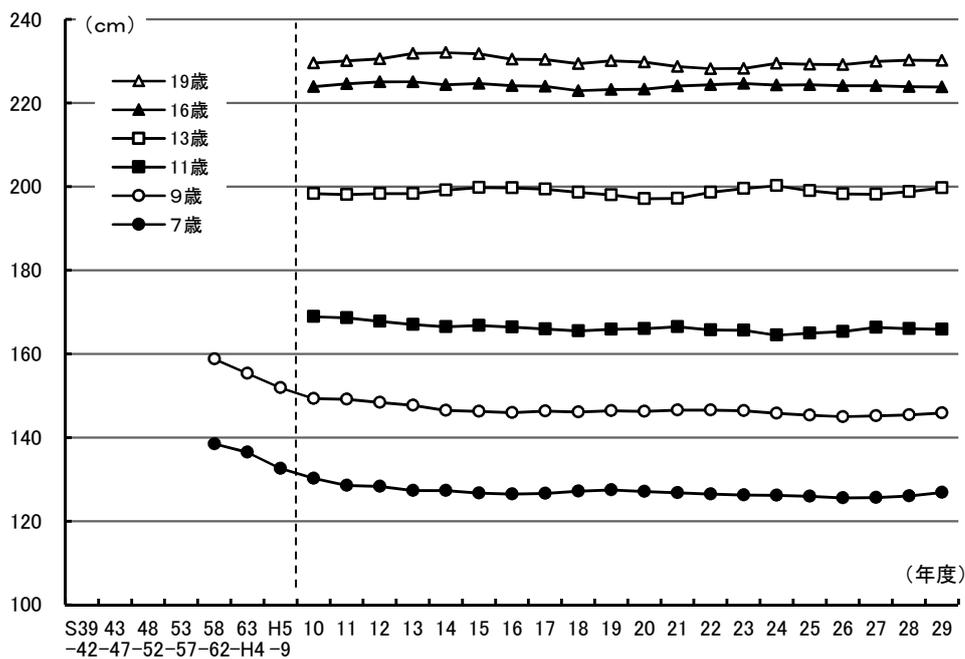


図 2-7 立ち幅とびの年次推移 (男子)

(注) 図 2-1 の (注) に同じ。

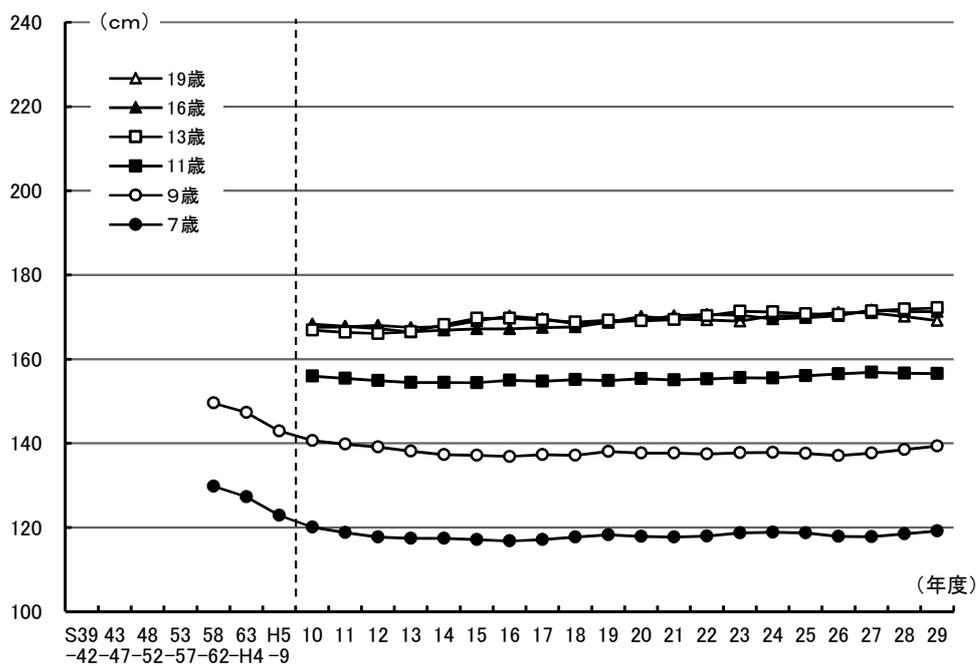


図 2-8 立ち幅とびの年次推移 (女子)

(注) 図 2-1 の (注) に同じ。

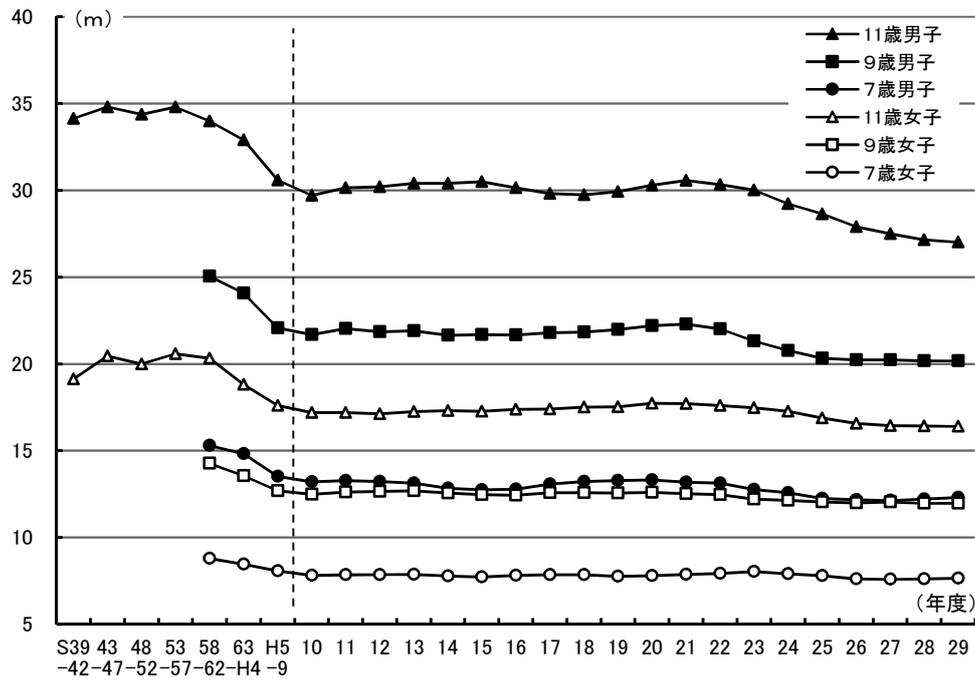


図 2 - 9 ソフトボール投げの年次推移

(注) 図 2 - 1 の (注) に同じ。

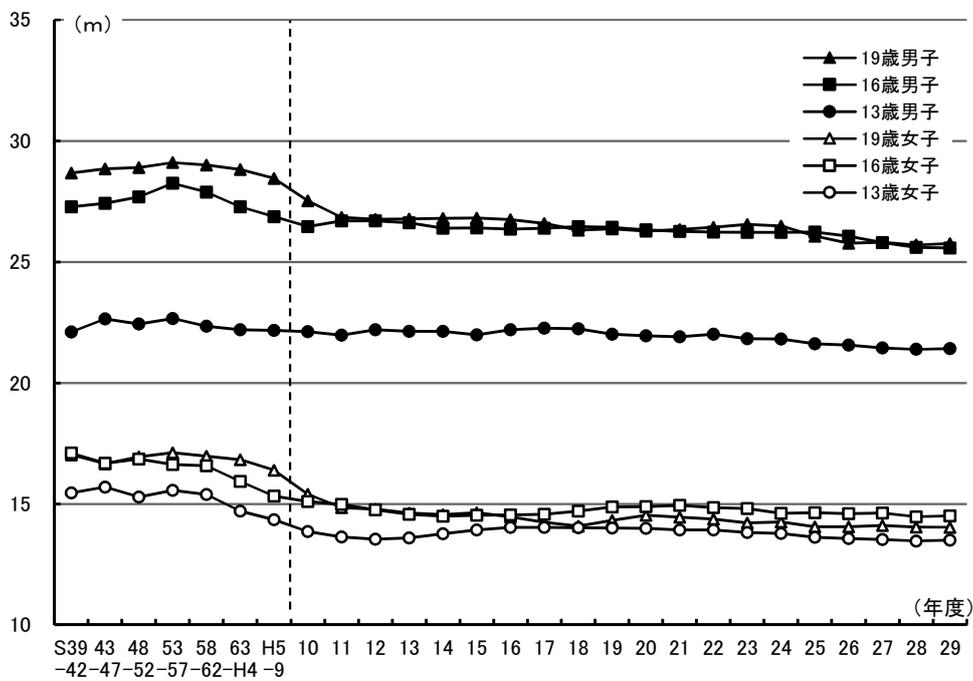


図 2 - 10 ハンドボール投げの年次推移

(注) 図 2 - 1 の (注) に同じ。

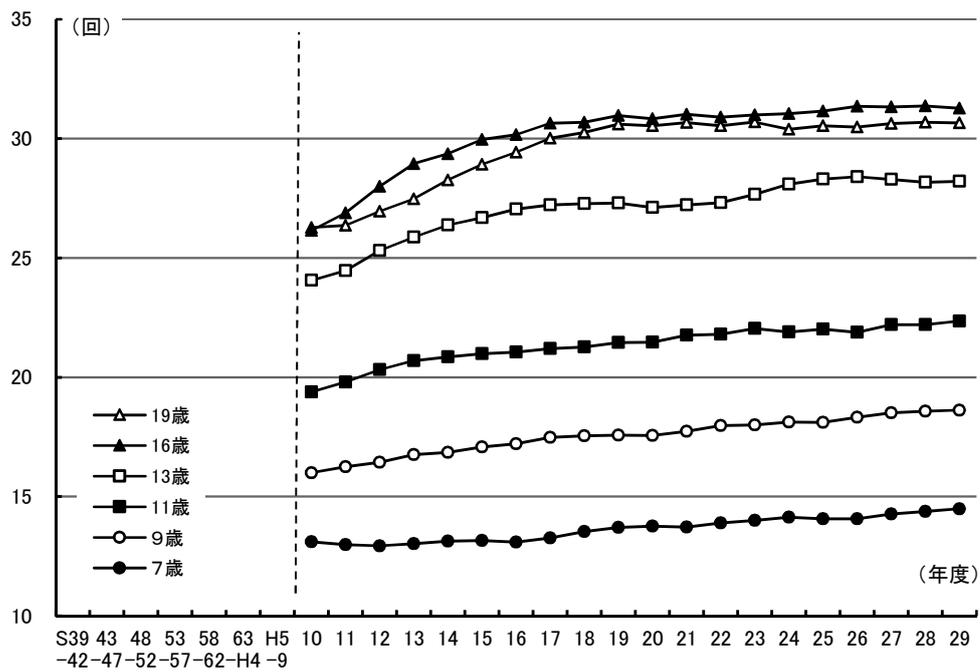


図 2 - 1 1 上体起こしの年次推移 (男子)

(注) 図は、3点移動平均法を用いて平滑化してある。

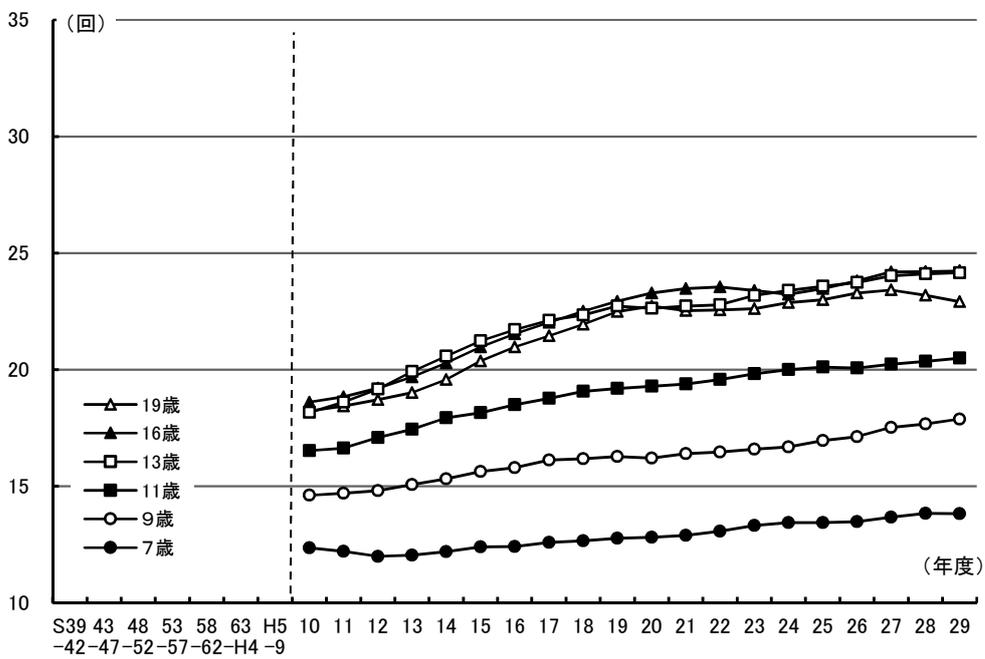


図 2 - 1 2 上体起こしの年次推移 (女子)

(注) 図 2 - 1 1 の (注) に同じ。

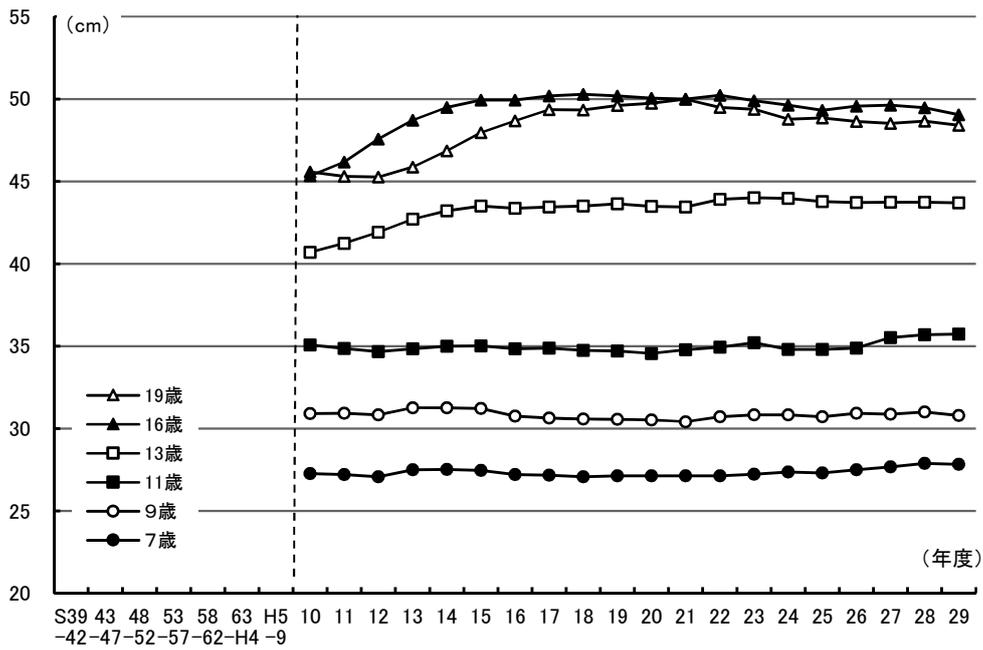


図 2 - 1 3 長座体前屈の年次推移 (男子)

(注) 図 2 - 1 1 の (注) に同じ。

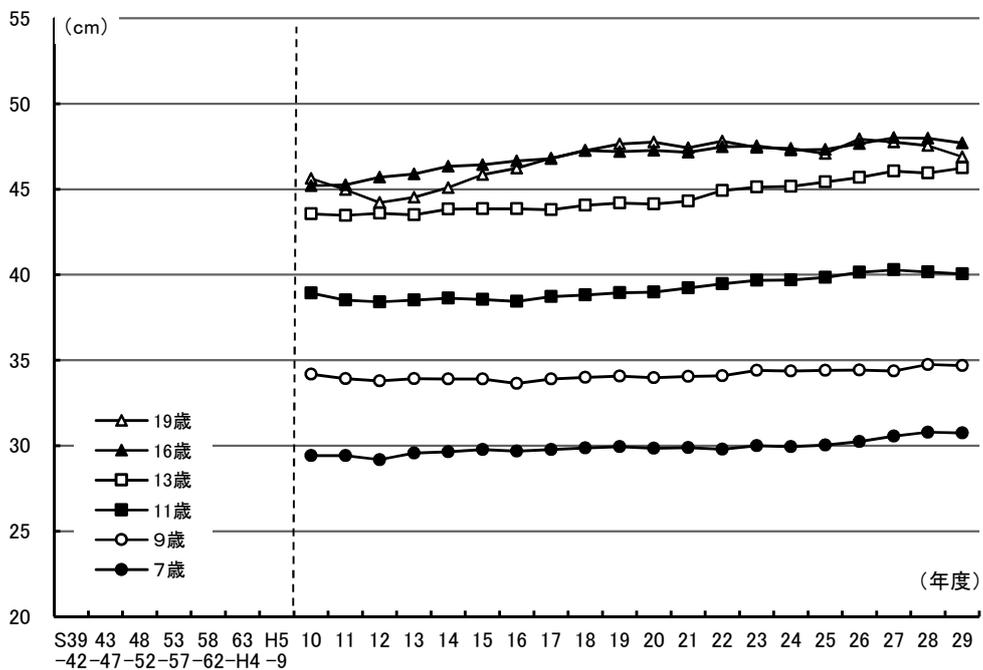


図 2 - 1 4 長座体前屈の年次推移 (女子)

(注) 図 2 - 1 1 の (注) に同じ。

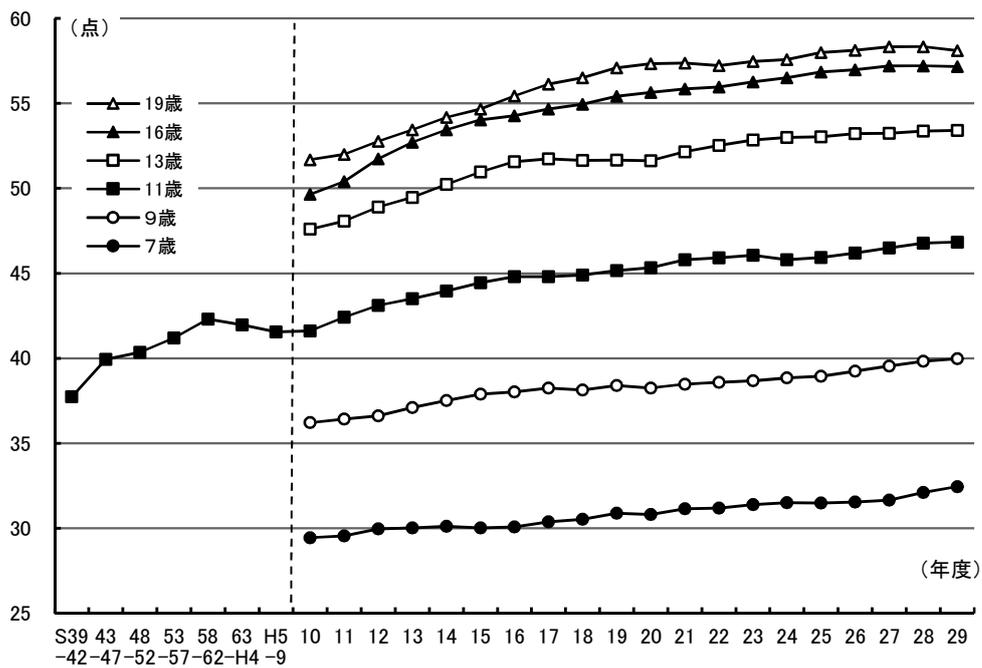


図 2 - 1 5 反復横とびの年次推移 (男子)

(注) 図 2 - 1 の (注) に同じ。

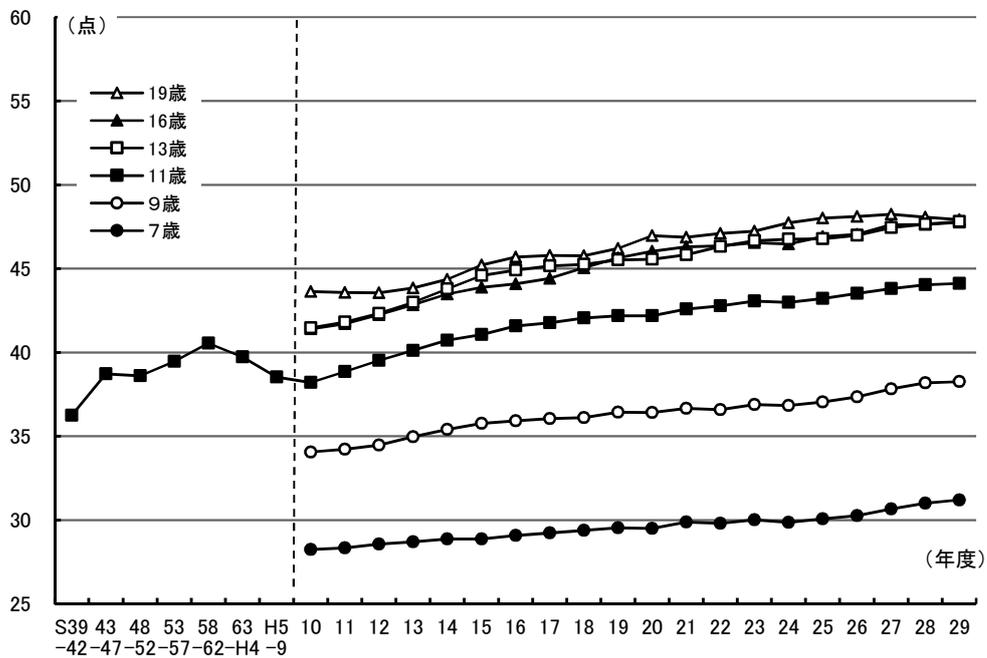


図 2 - 1 6 反復横とびの年次推移 (女子)

(注) 図 2 - 1 の (注) に同じ。

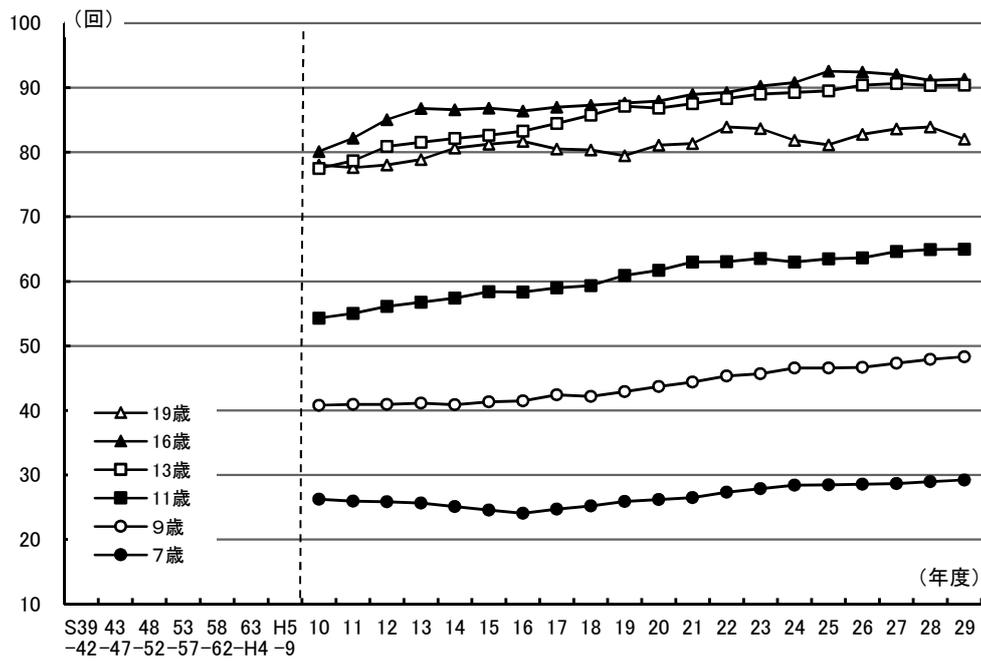


図 2 - 1 7 20mシャトルランの年次推移 (男子)

(注) 図 2 - 1 1 の (注) に同じ。

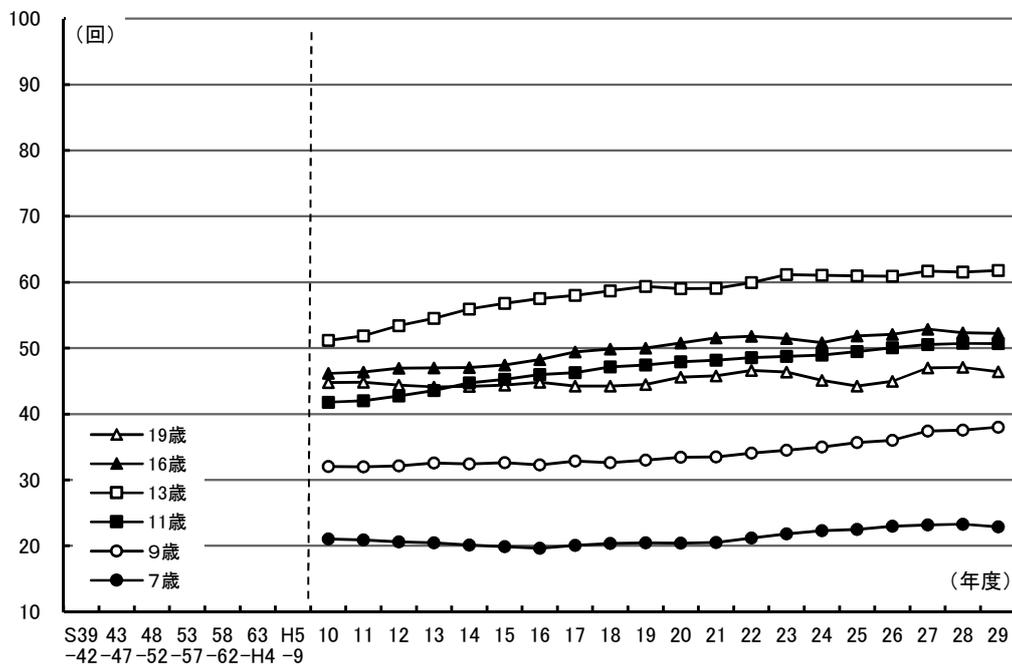


図 2 - 1 8 20mシャトルランの年次推移 (女子)

(注) 図 2 - 1 1 の (注) に同じ。

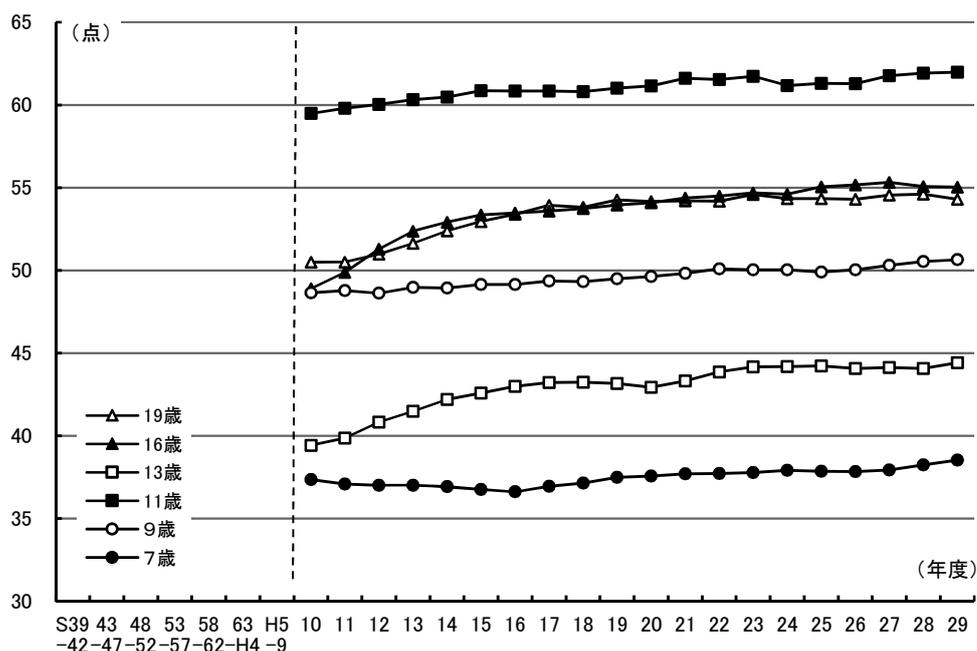


図 2 - 1 9 新体力テストの合計点の年次推移（男子）

- (注) 1. 図は，3点移動平均法を用いて平滑化してある。
 2. 合計点は，新体力テスト実施要項の「項目別得点表」による。
 3. 得点基準は6～11歳，12～19歳で異なる。

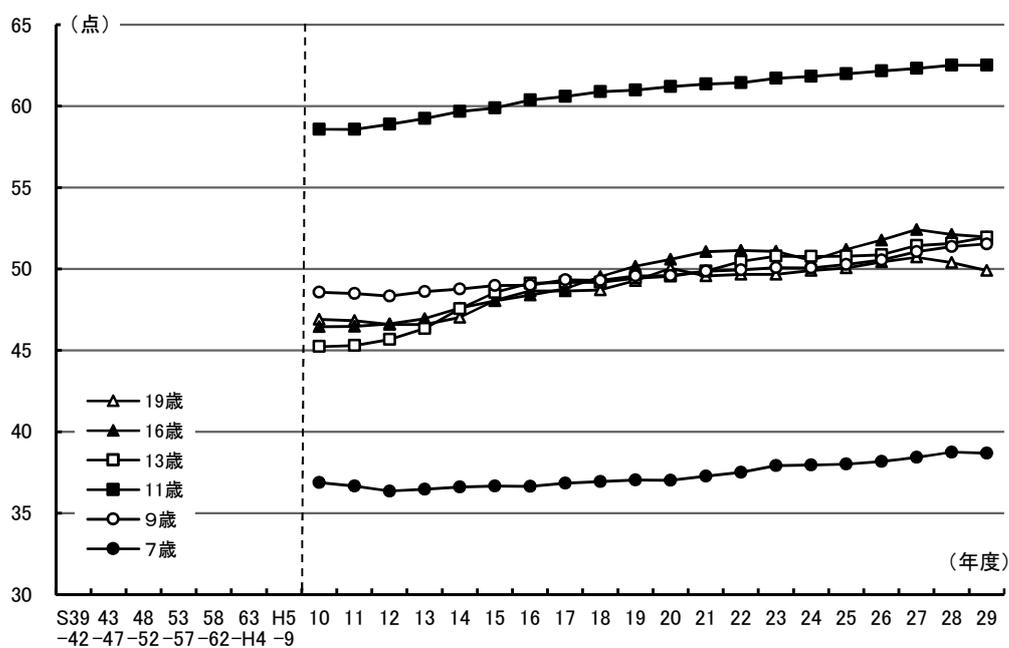


図 2 - 2 0 新体力テストの合計点の年次推移（女子）

- (注) 図 2 - 1 9 (注) に同じ。

(2) 成年(20歳から64歳)

長期(50年以上)にわたる年次推移の観察が可能である、握力、反復横とび、急歩について図2-21から図2-23に示した。また、新体力テスト施行以後の年次推移の観察が可能である、上体起こし、長座体前屈、20mシャトルラン、立ち幅とび及び新体力テスト合計点について図2-24から図2-28に示した。

平成29年度の握力、反復横とび、急歩を昭和50～60年頃と比較すると、握力は低下傾向、反復横とびは向上傾向、急歩は横ばいを示している。

最近10年間では、男女の長座前屈において低下傾向にあるが、その他の項目では、男女及び年代によって違いが見られるものの、合計点を含みほとんどの項目では、横ばいまたは向上傾向を示している。

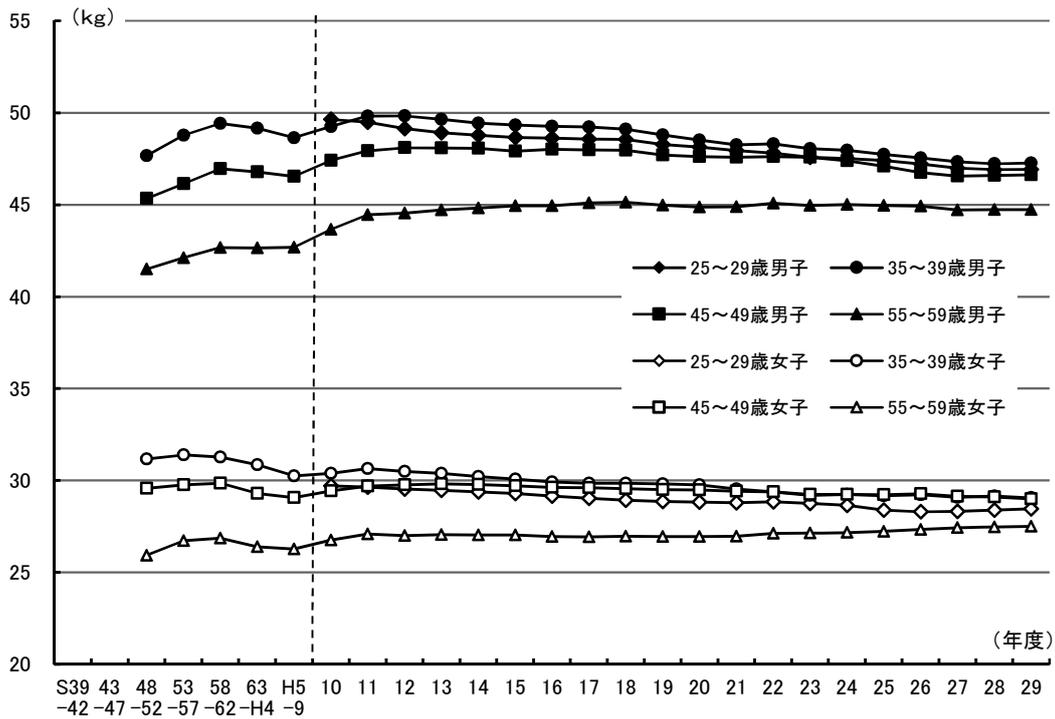


図 2 - 2 1 握力の年次推移

(注) 図 2 - 1 の (注) に同じ。

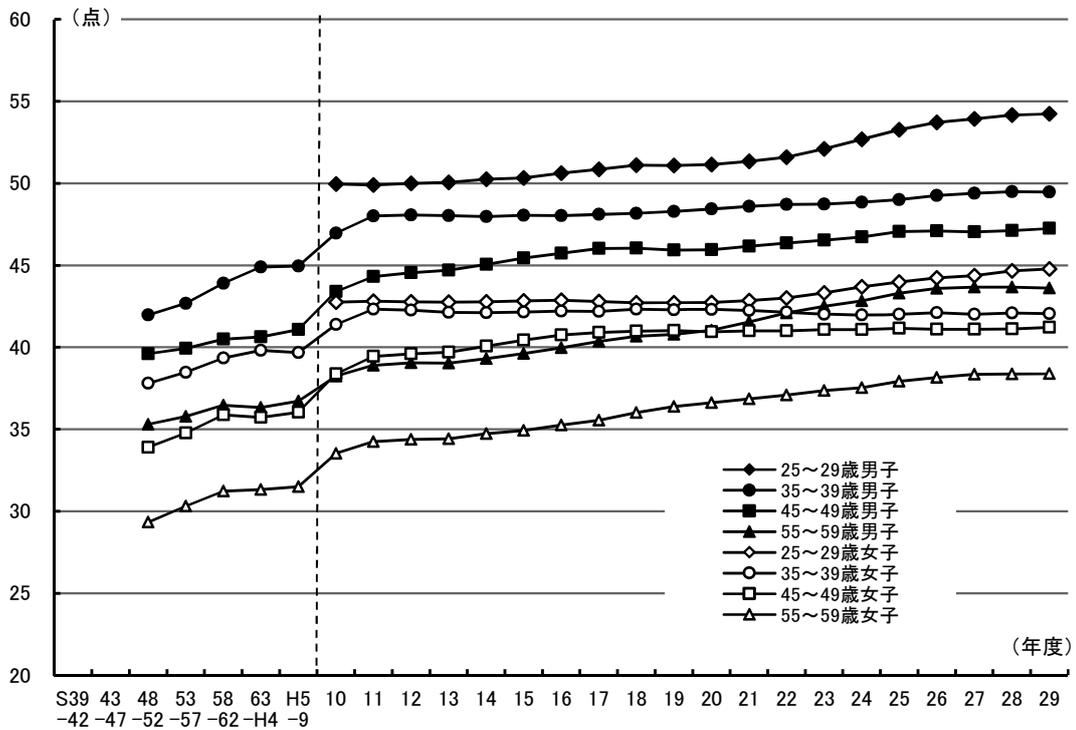


図 2 - 2 2 反復横とびの年次推移

(注) 図 2 - 1 の (注) に同じ。

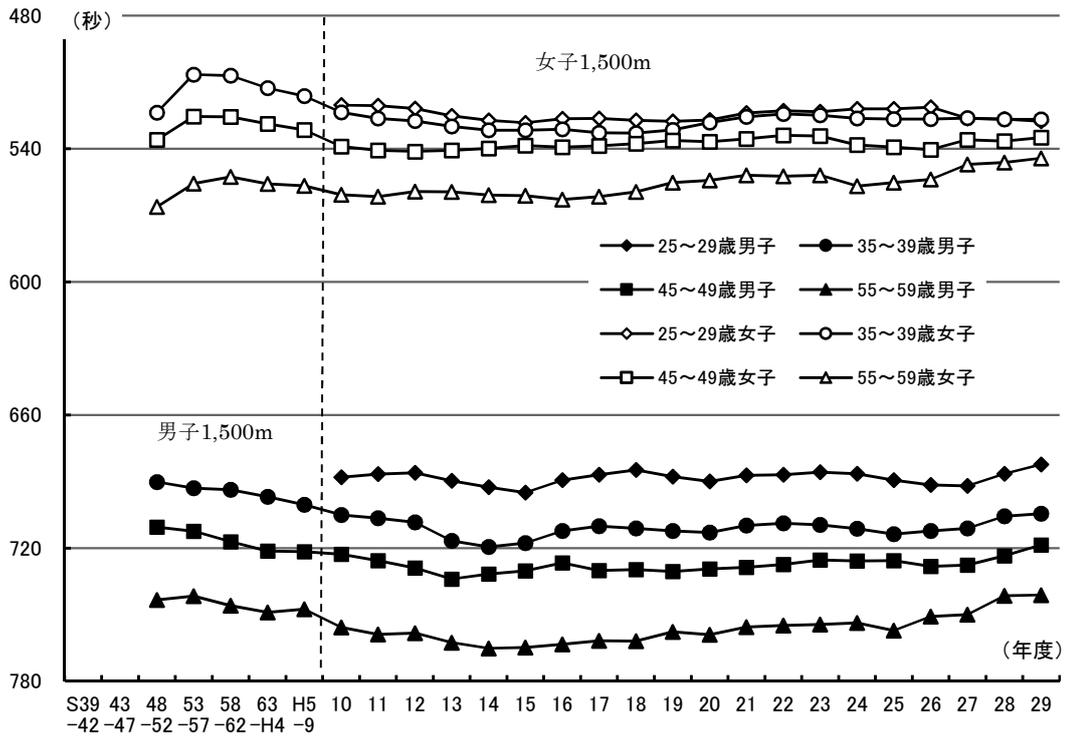


図 2 - 2 3 急歩の年次推移

(注) 図 2 - 1 の (注) に同じ。

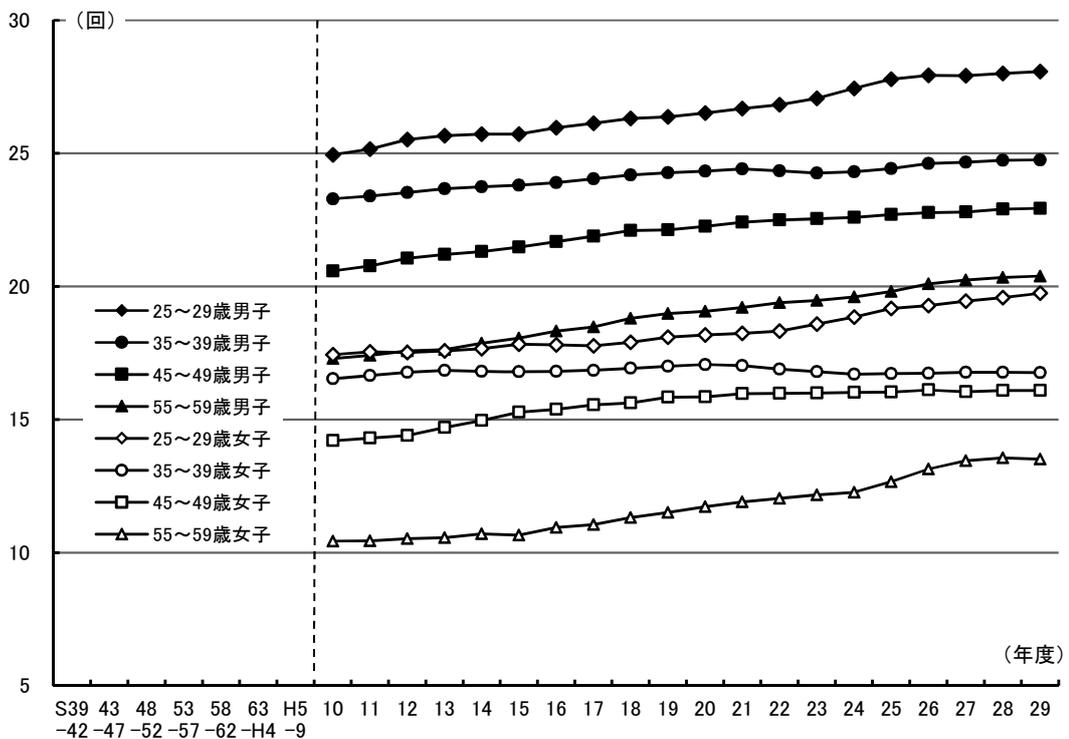


図 2 - 2 4 上体起こしの年次推移

(注) 図は、3点移動平均法を用いて平滑化してある。

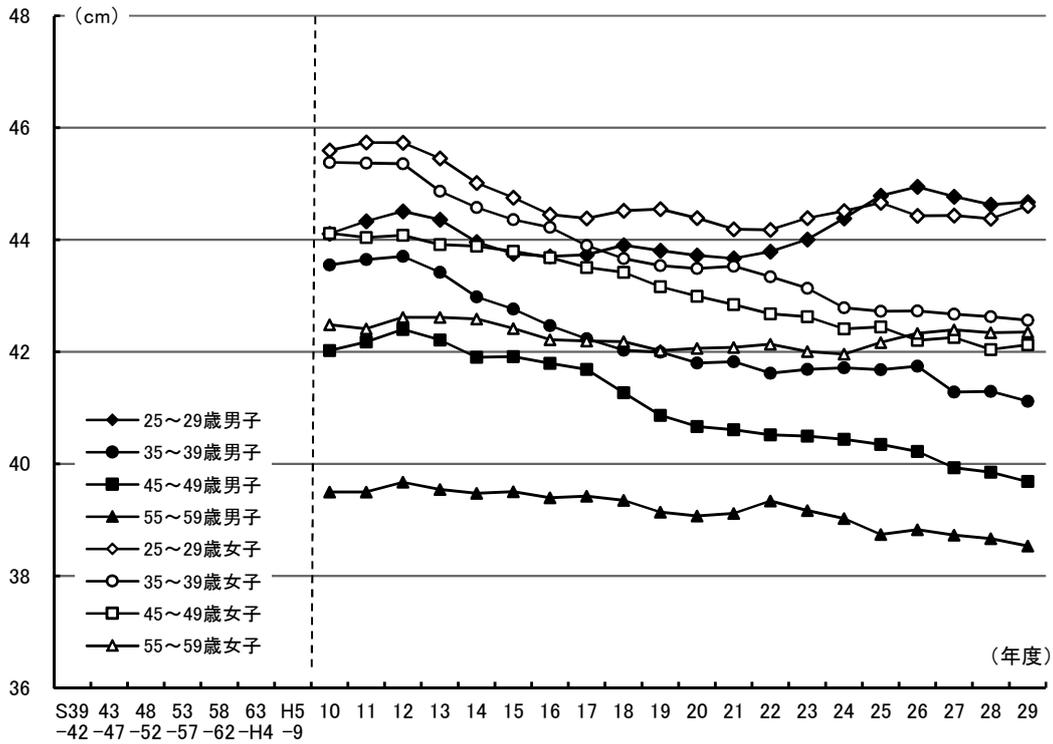


図 2 - 2 5 長座体前屈の年次推移

(注) 図 2 - 2 4 の (注) に同じ。

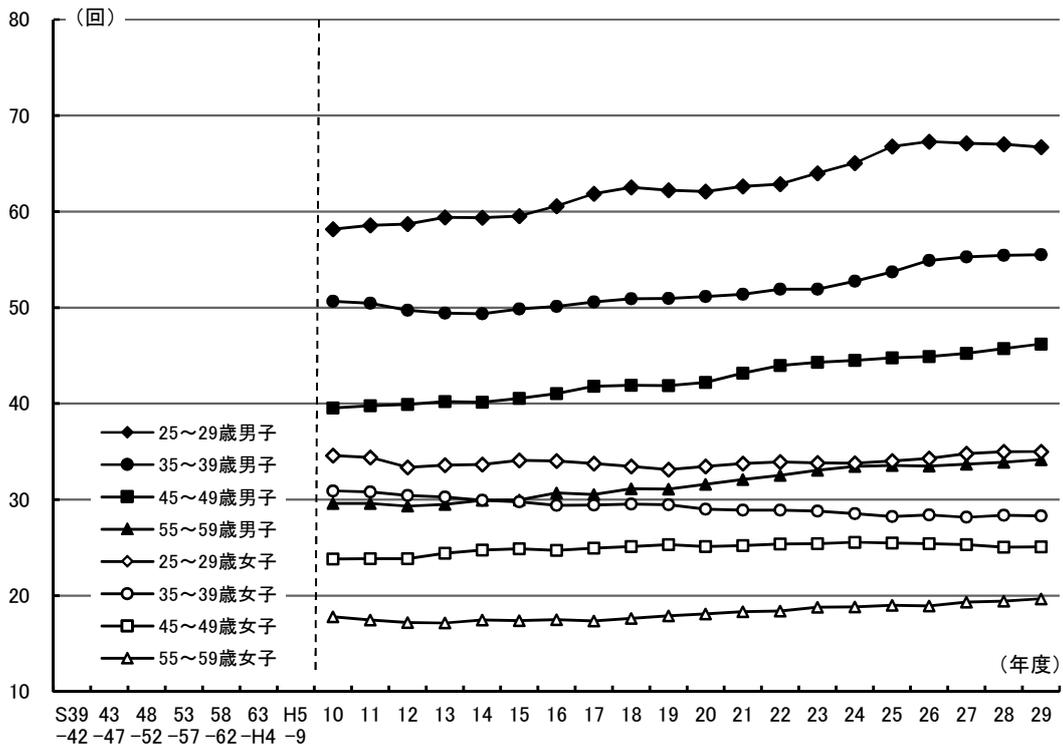


図 2 - 2 6 20mシャトルランの年次推移

(注) 図 2 - 2 4 の (注) に同じ。

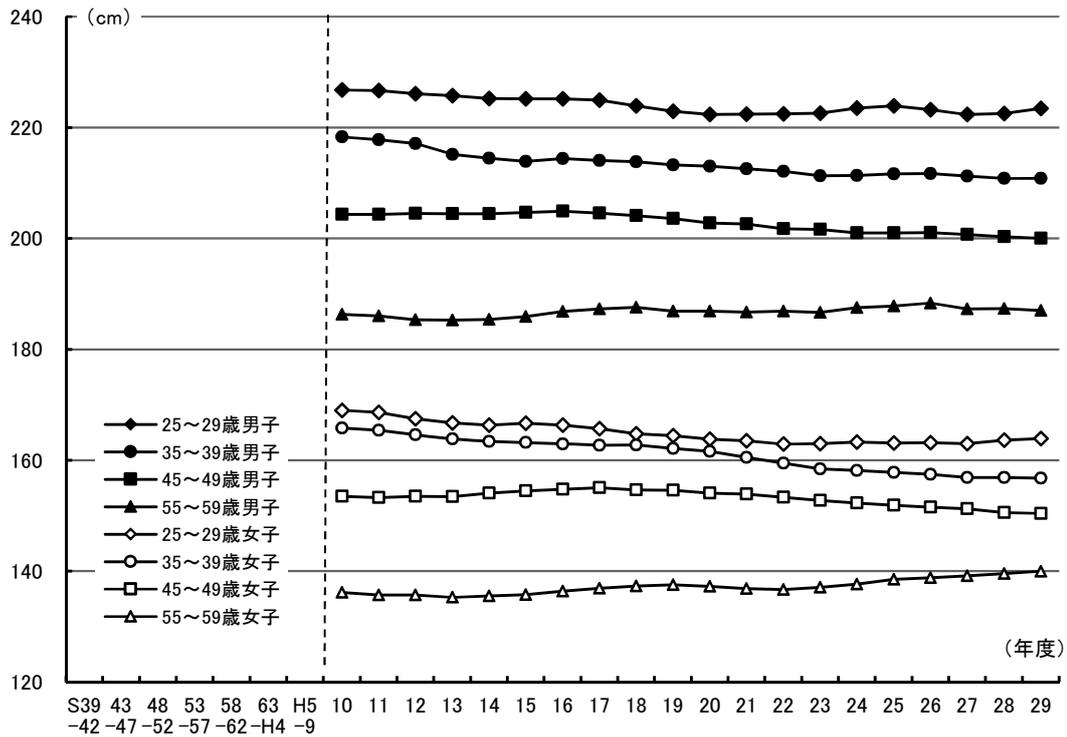


図 2 - 2 7 立ち幅とびの年次推移

(注) 図 2 - 2 4 の (注) に同じ。

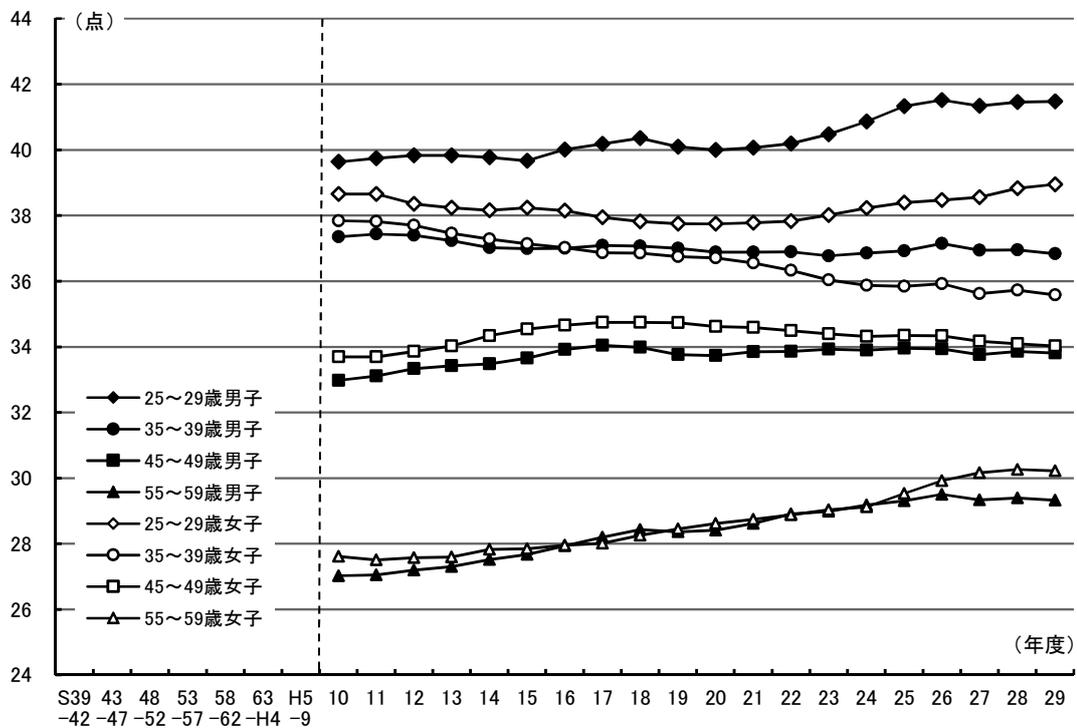


図 2 - 2 8 新体力テストの合計点の年次推移

- (注) 1. 図は、3点移動平均法を用いて平滑化してある。
- 2. 合計点は、新体力テスト実施要項の「項目別得点表」による。
- 3. 得点基準は、男女により異なる。

(3) 高齢者（65歳から79歳）

高齢者における握力，上体起こし，長座体前屈，開眼片足立ち，10m障害物歩行，6分間歩行及び新体力テストの合計点について，新体力テスト施行後の20年間の年次推移を図2-29から図2-35に示した。

ほとんどの項目及び合計点で向上傾向を示している。

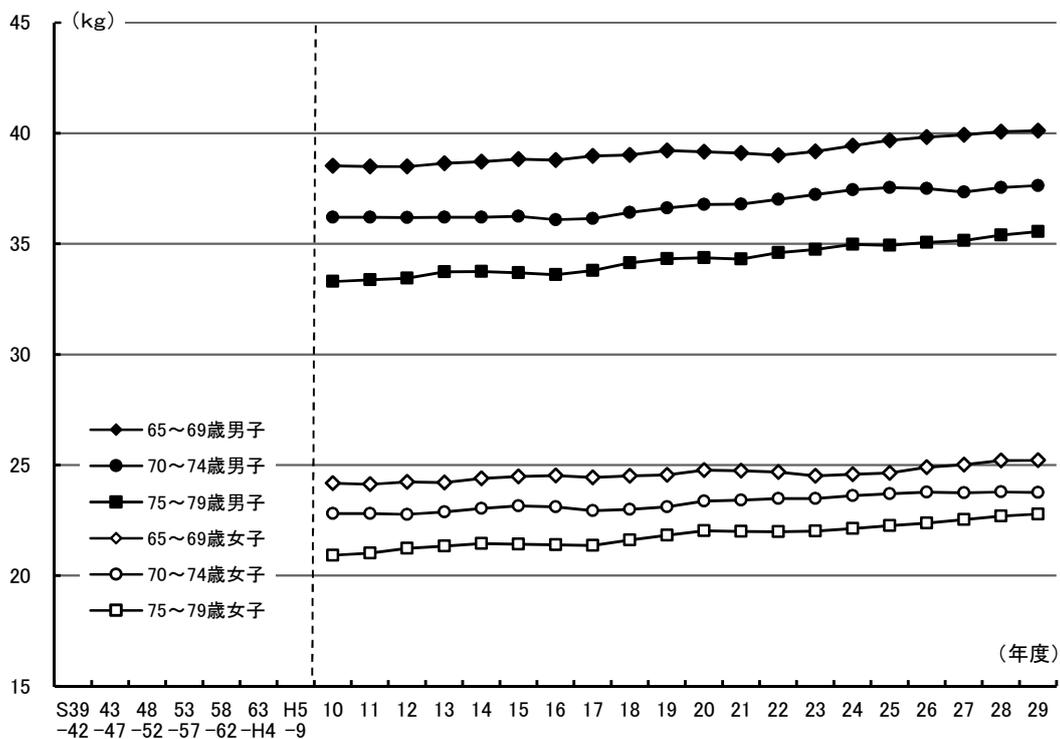


図2-29 握力の年次推移

(注) 図は，3点移動平均法を用いて平滑化してある。

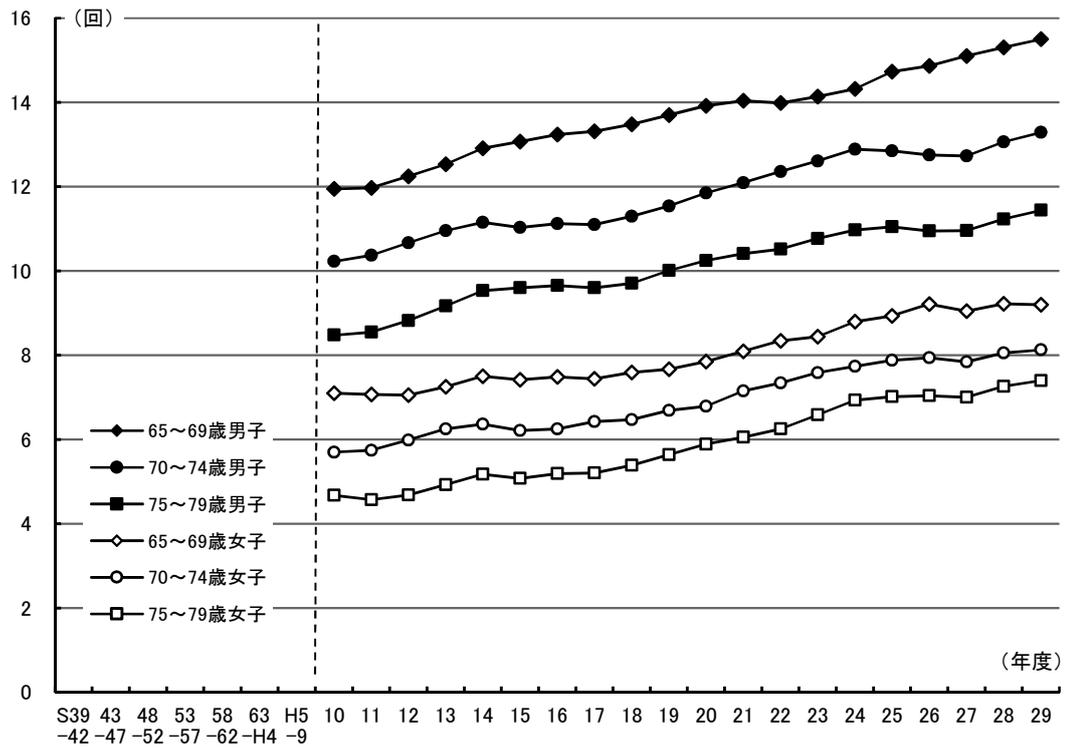


図 2 - 3 0 上体起こしの年次推移

(注) 図 2 - 2 9 の (注) に同じ。

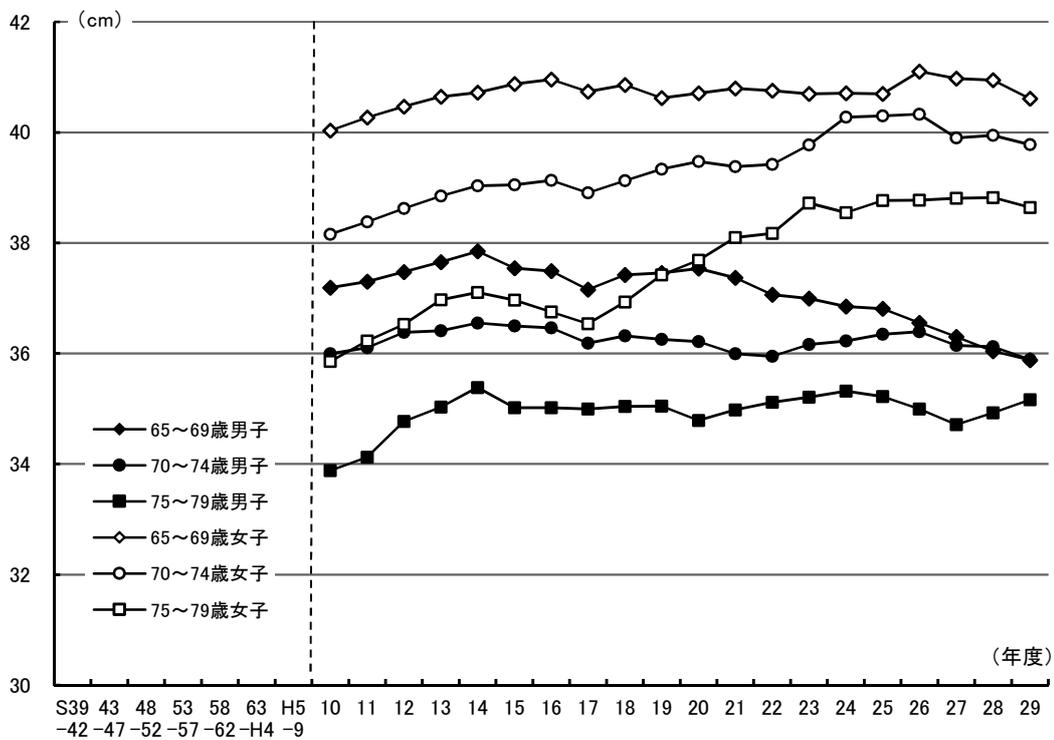


図 2 - 3 1 長座体前屈の年次推移

(注) 図 2 - 2 9 の (注) に同じ。

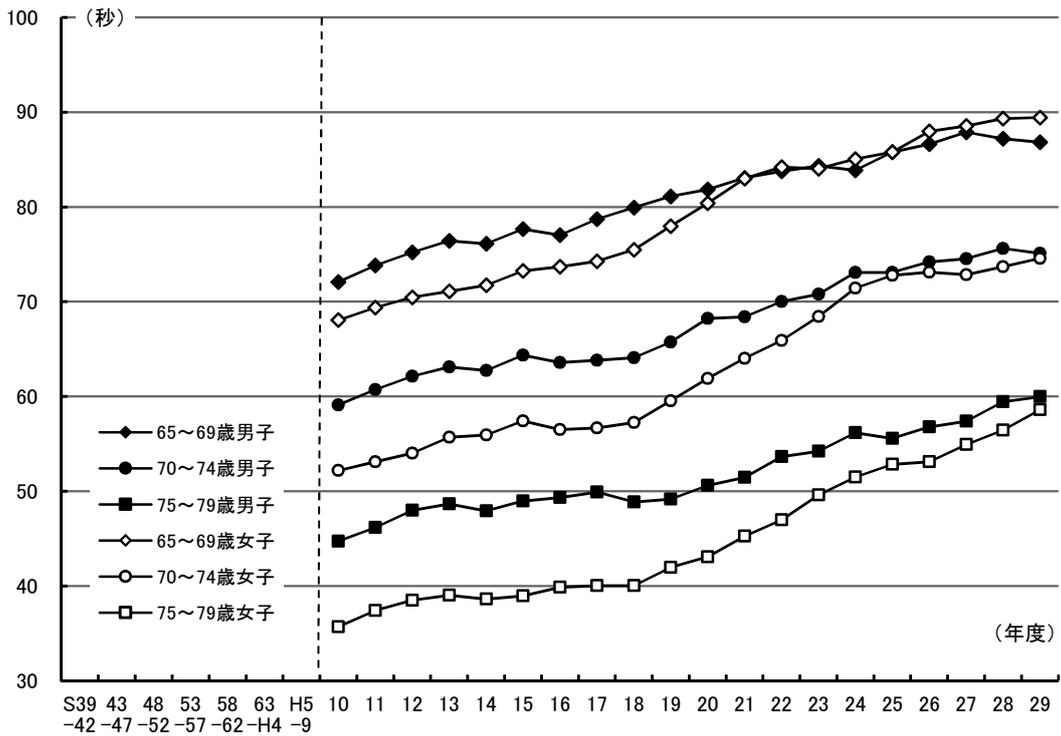


図 2 - 3 2 開眼片足立ちの年次推移

(注) 図 2 - 2 9 の (注) に同じ。

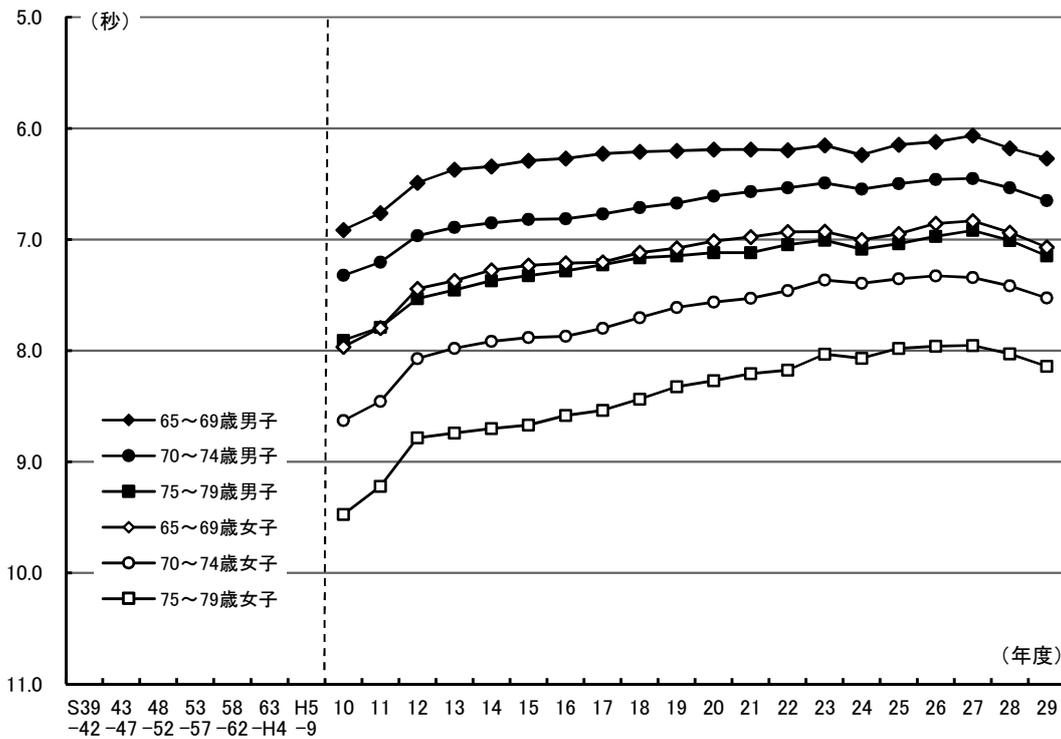


図 2 - 3 3 10m障害物歩行の年次推移

(注) 図 2 - 2 9 の (注) に同じ。

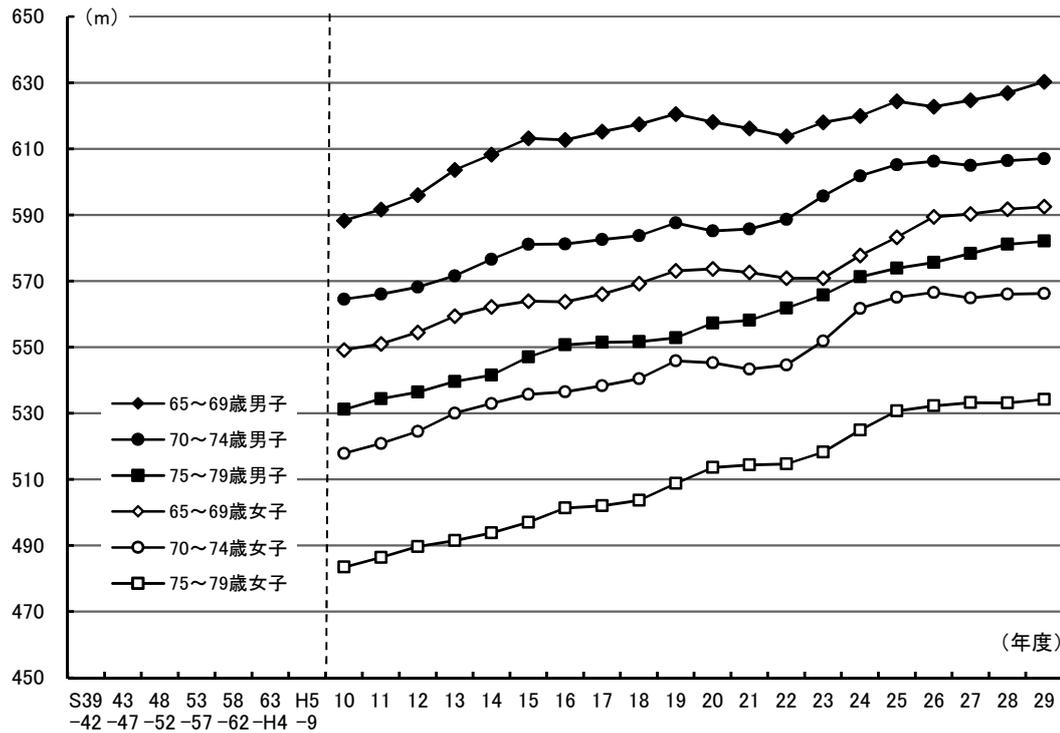


図 2 - 3 4 6分間歩行の年次推移

(注) 図 2 - 2 9 の (注) に同じ。

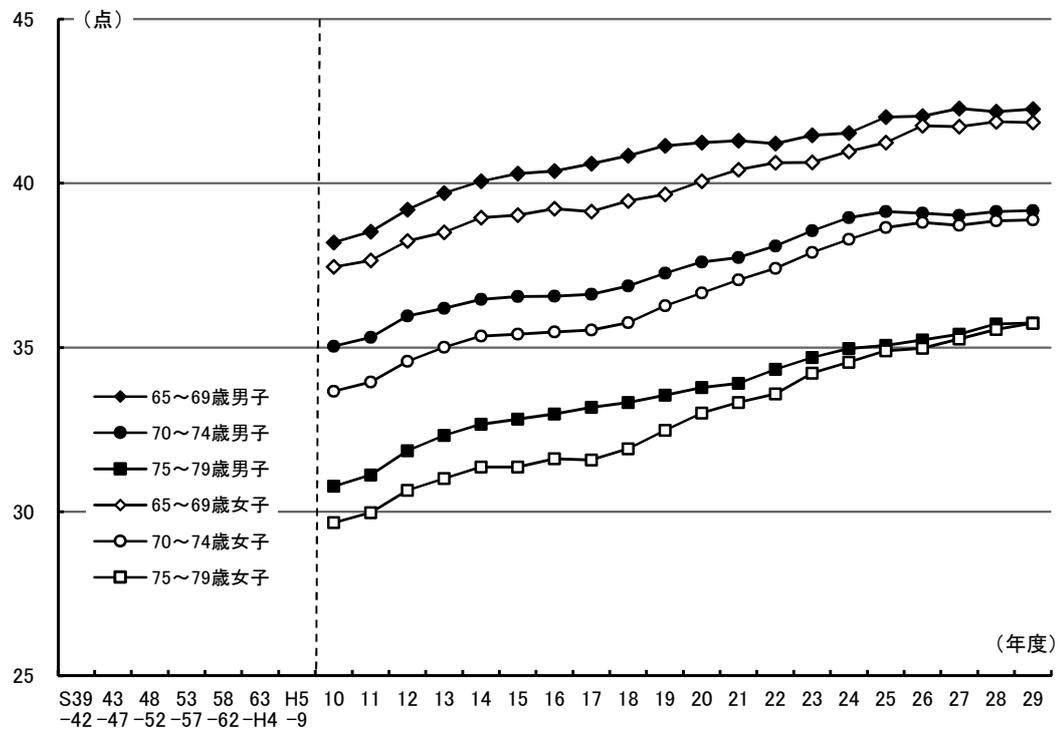


図 2 - 3 5 新体力テストの合計点の年次推移

- (注) 1. 図は、3点移動平均法を用いて平滑化してある。
- 2. 合計点は、新体力テスト実施要項の「項目別得点表」による。
- 3. 得点基準は、男女により異なる。

3 高齢者の体力

(1) ADL (日常生活活動テスト)

ADLの12項目の間に、65～69歳でそれぞれ最も体力水準が高い『3』と答えた者の割合(%)を高い順に並べ、図3-1(男子)及び図3-2(女子)に示した。

男子の場合、65～69歳で、80%以上が『3』と答えた項目は、「10kg程度の荷物を10m運べる(問11)」、「布団の上げ下ろしができる(問10)」、「立ったままでズボンやスカートがはける(問8)」である。その他の間に対しては、「片手でもシャツの前ボタンを、掛けたり外したりできる(問9)」と「10分以上走れる(問2)」を除き、50%以上の回答が得られた。その後、加齢に伴い、これらの割合は減少する傾向を示している。なお、75～79歳で「10分以上走れる(問2)」と答えた割合は約30%になっている。

女子の場合、全般的に『3』と答えた割合は、程度の差はみられるが男子よりも低い。65～69歳で『3』と答えた項目が、60%を超えるのは、「立ったままでズボンやスカートがはける(問8)」と「布団の上げ下ろしができる(問10)」、「正座の姿勢から手を使わずに立ち上がれる(問5)」である。「バスや電車に乗ったとき、発車や停車のとき以外は何にもつかまらずに立っている(問7)」「片手でもシャツの前ボタンを、掛けたり外したりできる(問9)」の項目では50%を割り、「仰向けに寝た姿勢から、手を使わないで、上体だけを3～4回以上起こせる(問12)」では約35%、「10分以上走れる(問2)」は約20%になっている。その後、男子と同様に加齢に伴い減少する傾向を示している。なお、75～79歳で「10分以上走れる(問2)」と答えた割合は約15%になっている。

ADLの総合得点による判定結果を表1に示した。

65～79歳でテスト項目により実施が不可能な×と判定された高齢者はほとんどみられなかった。また、すべてのテスト項目が実施可能な○の判定であった高齢者の割合は、男女ともに加齢に伴い減少するが、女子は男子に比べ低下の程度が大きい。

表1 総合得点によるADL判定結果

年齢 区分	性 別		男 子						女 子					
	ADL 判定		×		△		○		×		△		○	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
65～69歳	0	0.0	30	3.3	878	96.7	0	0.0	56	6.3	829	93.7		
70～74歳	1	0.1	37	4.1	867	95.8	0	0.0	114	12.7	782	87.3		
75～79歳	0	0.0	74	8.2	827	91.8	1	0.1	158	18.1	715	81.8		

(注) 1. ×: 総合得点12点以下, △: 総合得点13点～23点, ○: 総合得点24点以上

2. 人数は、ADLの12項目全てに回答した者の数。

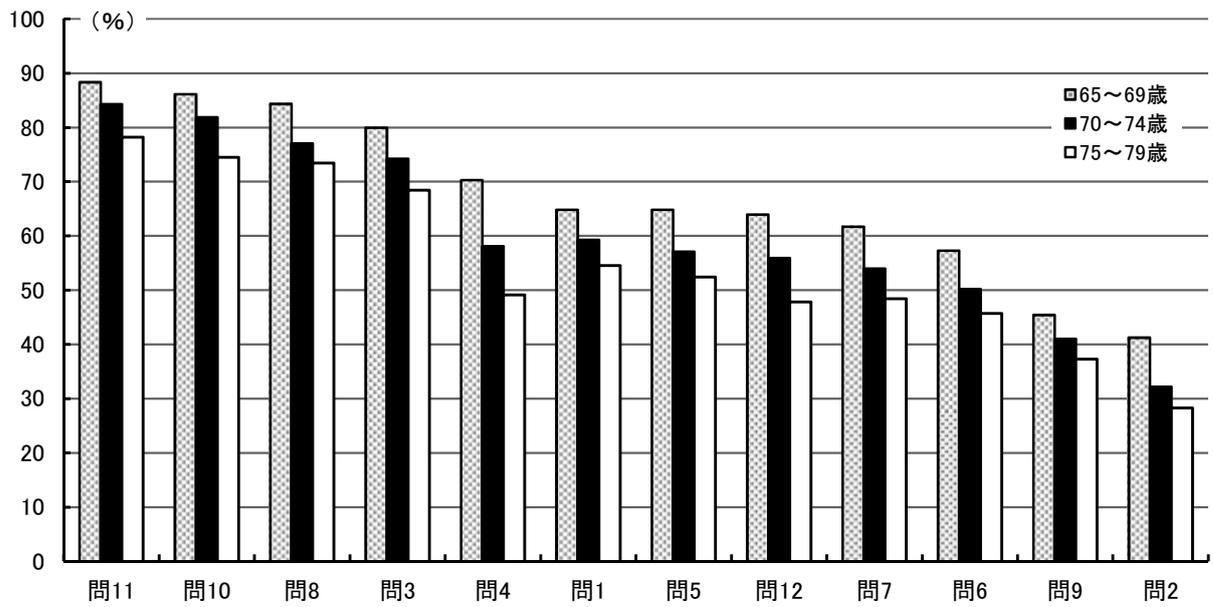


図 3 - 1 A D L 1 2 項目の問に「3」と答えた割合（男子）

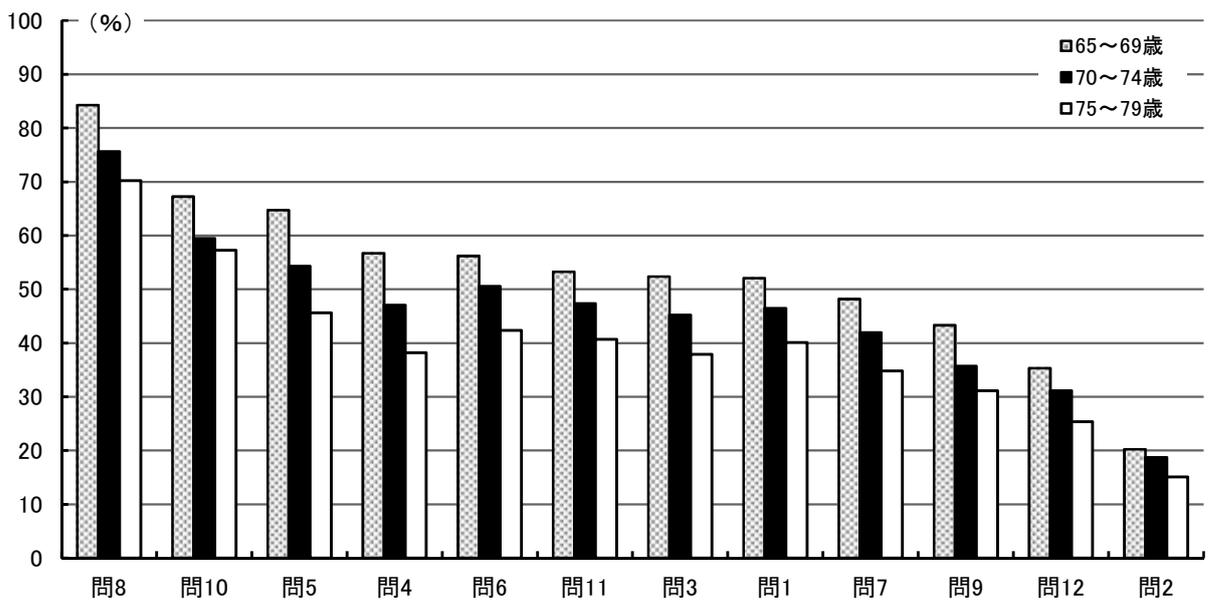


図 3 - 2 A D L 1 2 項目の問に「3」と答えた割合（女子）

(2) バランス能力及び歩行能力

65歳から79歳だけを対象としたテスト項目である開眼片足立ち、10m障害物歩行及び6分間歩行の変化の傾向を図3-3に示した。

全体としては男女とも加齢に伴って直線的に低下する傾向を示す。

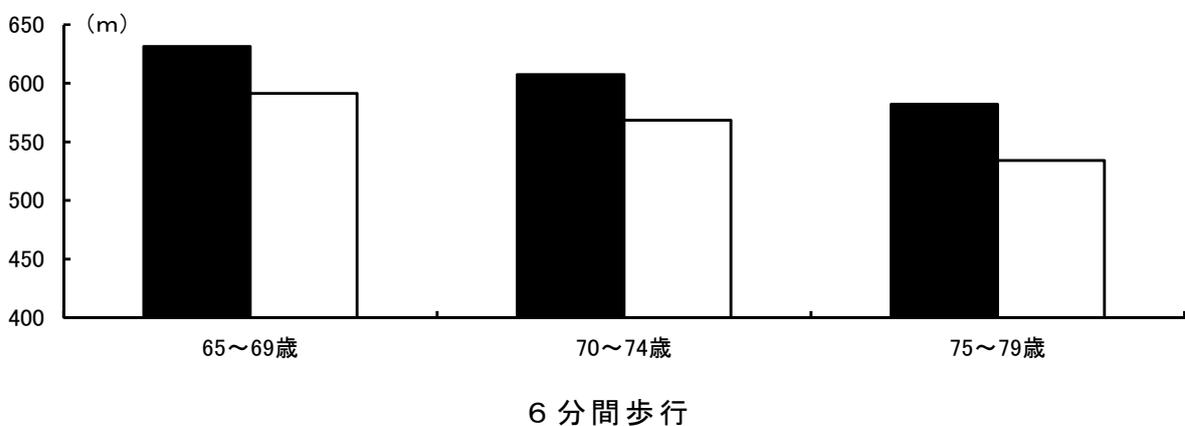
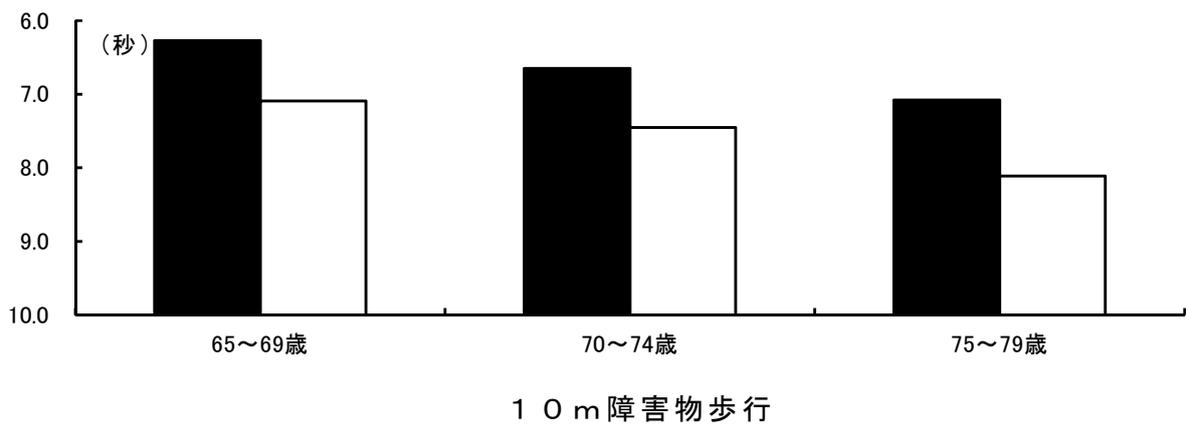
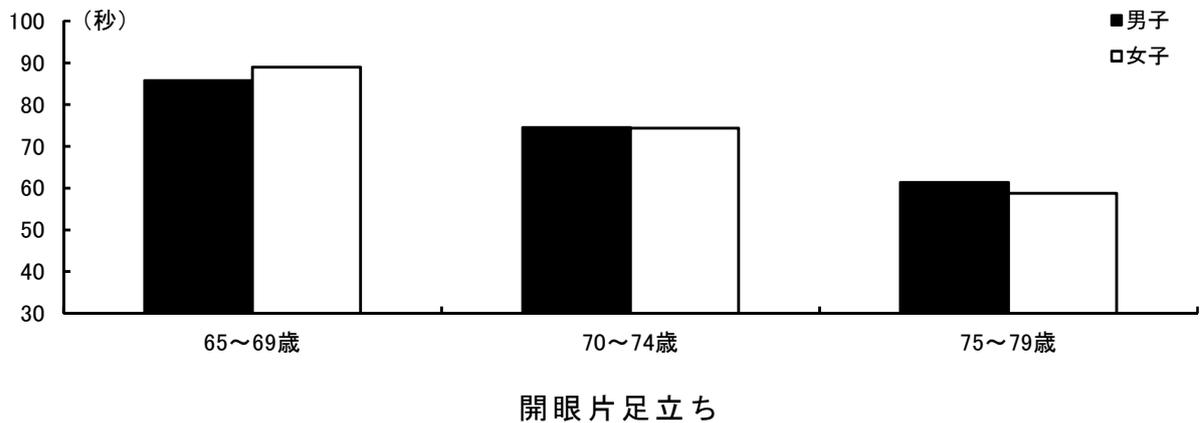


図3-3 バランス能力及び歩行能力の変化

4 運動・スポーツの実施状況と体力

(1) 運動・スポーツの実施頻度と体力

運動・スポーツの実施頻度と新体力テストの合計点との関係を、年齢段階別に図 4-1 (男子) 及び図 4-2 (女子) に示した。

6, 7 歳では、運動を実施する頻度による合計点の差は小さいが、8 歳ごろからは加齢に伴って合計点が増加し、ほとんどの年代において運動・スポーツを実施する頻度が高いほど、合計点も高い傾向にある。

20 歳以降の合計点は、運動・スポーツの実施頻度にかかわらず低下し、低下の度合いは、特に 50 歳代前半から大きくなるが、ほとんどの年代において運動・スポーツを実施する頻度が高いほど、合計点も高い傾向を示している。

運動・スポーツの実施頻度が高いほど体力水準が高いという関係は、男女ともにほとんどの年齢で認められ、運動・スポーツの実施頻度は、生涯にわたって体力を高い水準に保つための重要な要因の一つであると考えられる。

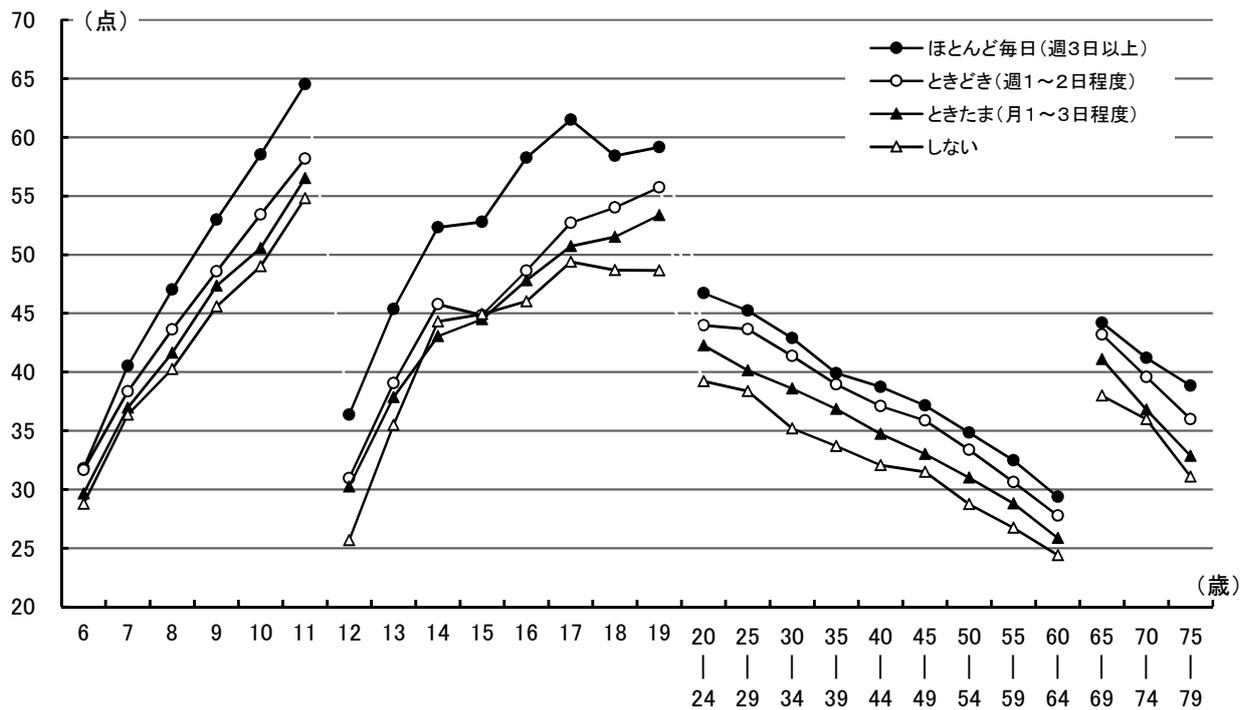


図 4 - 1 運動・スポーツの実施頻度別新体力テストの合計点（男子）

(注) 1. 合計点は、新体力テスト実施要項の「項目別得点表」による。
 2. 得点基準は、6～11歳，12～19歳，20～64歳，65～79歳で異なる。

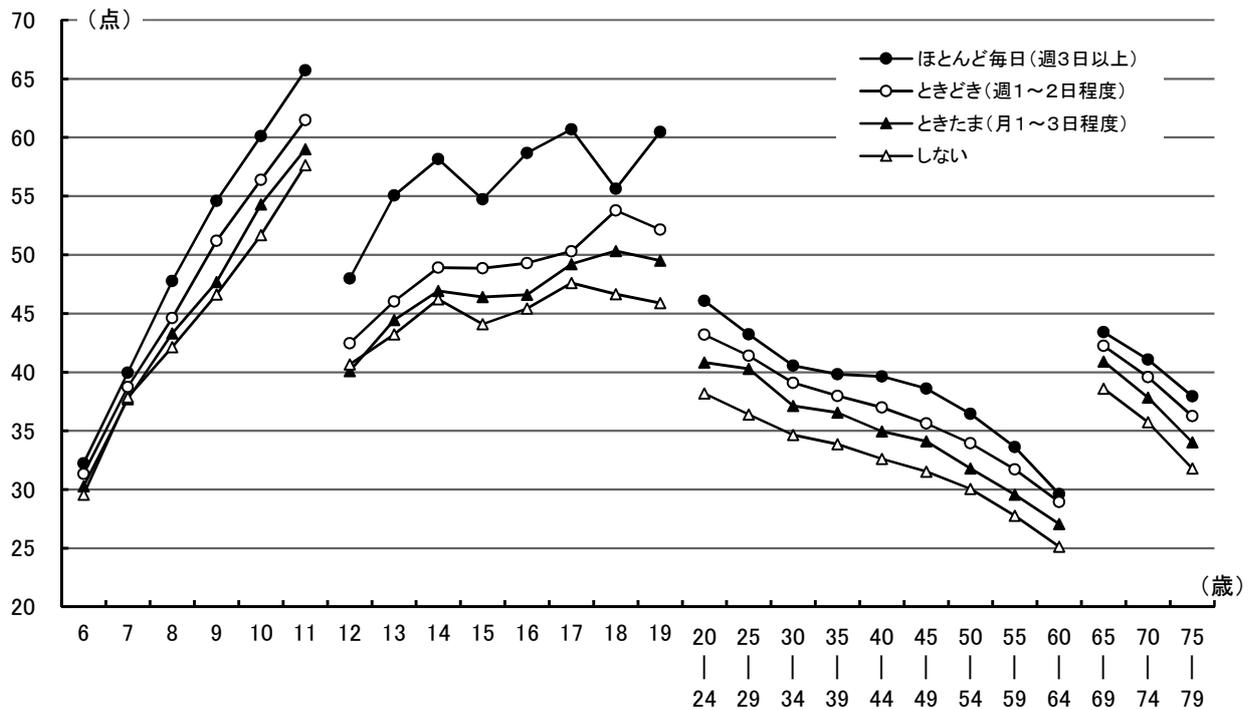


図 4 - 2 運動・スポーツの実施頻度別新体力テストの合計点（女子）

(注) 図 4 - 1 の(注)に同じ。

(2) 1日の運動・スポーツ実施時間と体力

運動・スポーツを行う際の1日の実施時間と新体力テストの合計点との関係を、年齢段階別に、図4-3（男子）及び図4-4（女子）に示した。

8歳ごろから19歳までは、男女ともに1日の運動・スポーツ実施時間が長いほど合計点は高い傾向にある。

20歳以降の合計点は、1日の運動・スポーツ実施時間にかかわらず低下している。また、ほとんどの年代において、30分以上行う3群はいずれも「30分未満」しか行わない群より高い値を示している。

1日の運動・スポーツ実施時間が長いほど体力水準が高いという関係は、男女ともにほとんどの年齢で認められる。

1日の運動・スポーツ実施時間は、生涯にわたって体力を高い水準に保つための重要な要因の一つであると考えられる。

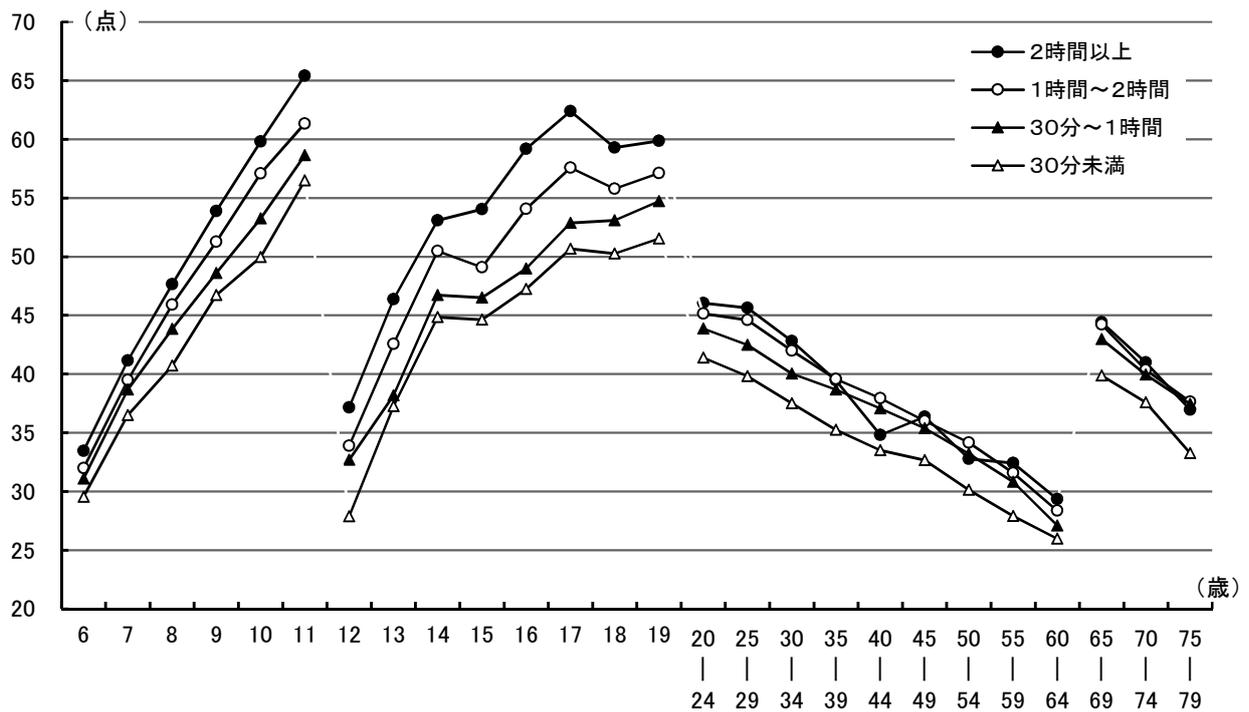


図 4 - 3 1日の運動・スポーツ実施時間別新体カテストの合計点（男子）

（注）図 4 - 1 の（注）に同じ。

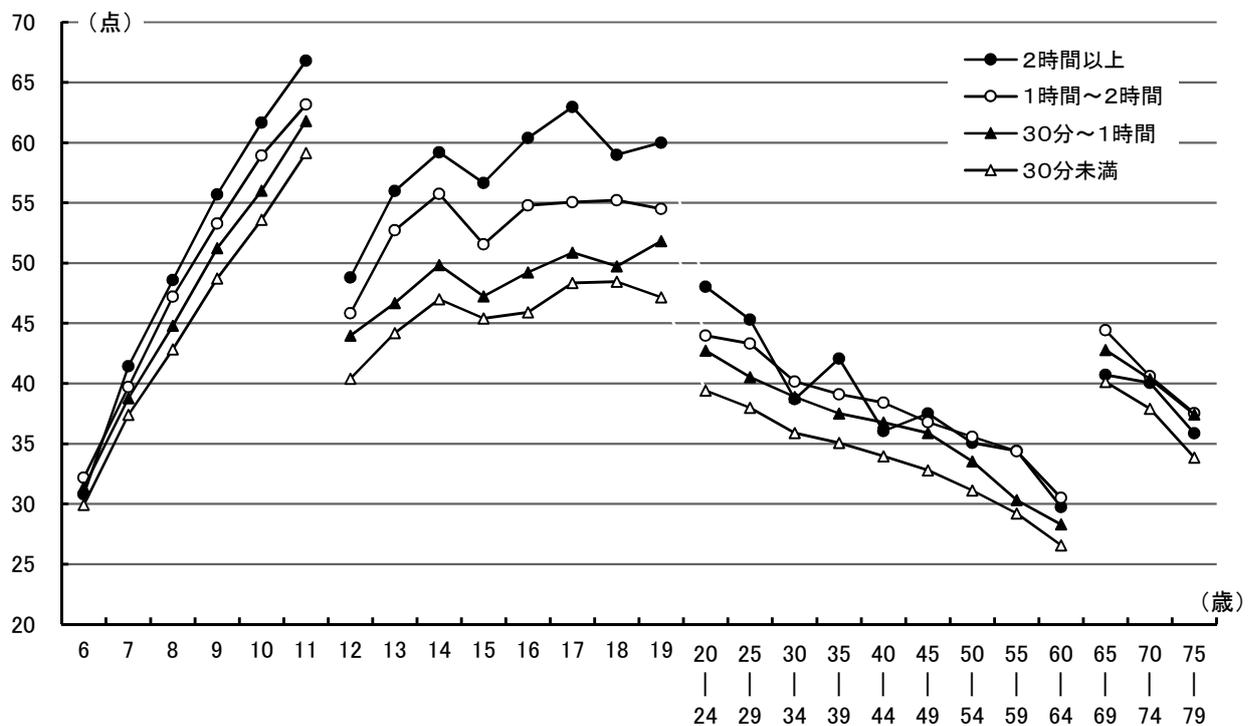


図 4 - 4 1日の運動・スポーツ実施時間別新体カテストの合計点（女子）

（注）図 4 - 1 の（注）に同じ。

(3) 運動部やスポーツクラブへの所属の有無と体力

運動部やスポーツクラブへの所属の有無と新体力テストの合計点との関係を、年齢段階別に、図 4-5 (男子) 及び図 4-6 (女子) に示した。

男女とも、運動部やスポーツクラブへ所属している群の方が所属していない群よりも合計点は高い傾向にある。

6, 7 歳では、運動部やスポーツクラブへの所属の有無による合計点の差は小さいが、その後の両群の差は徐々に大きくなる。

12~19 歳においても両群の差は一層開く傾向を示している。

20 歳以降の合計点は、運動部やスポーツクラブへの所属の有無にかかわらず低下し、男子の所属している群は所属していない群より 2~3 点、高い値を示している。

女子の所属している群は所属していない群より 3~6 点、高い値を示している。

したがって、運動部やスポーツクラブでの活動は、生涯にわたって高い体力水準を維持するための重要な役割を果たしていることがうかがえる。

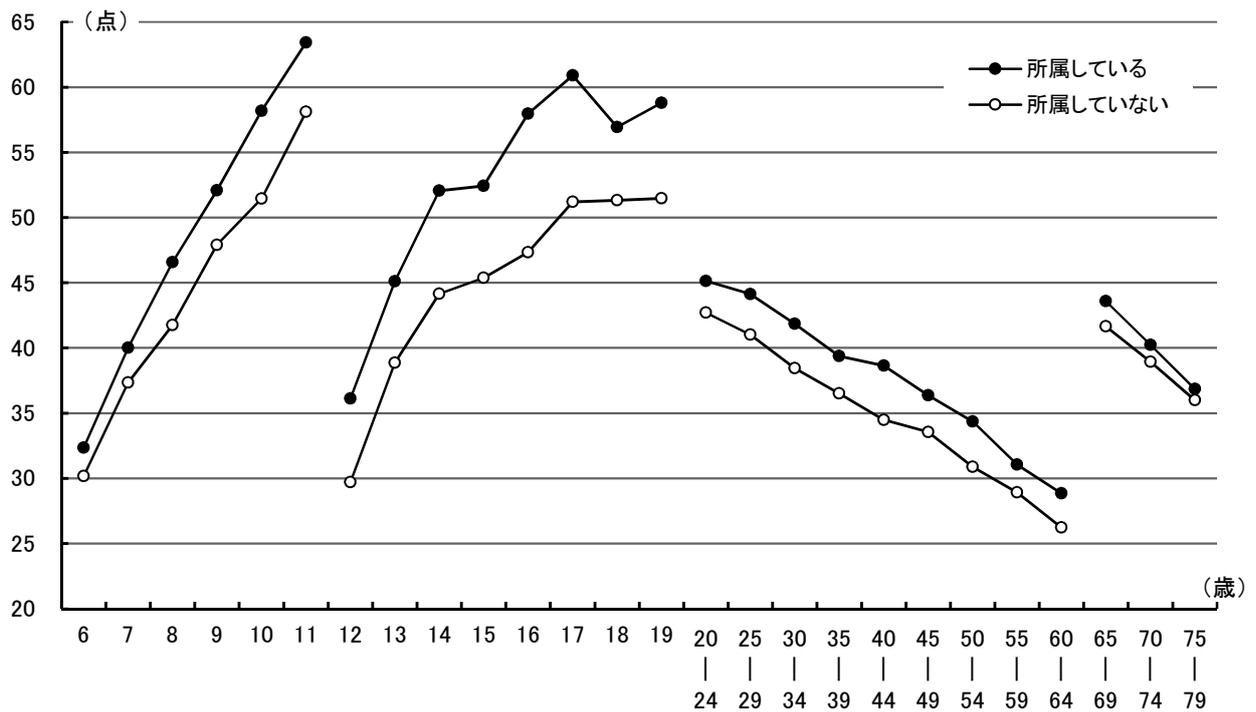


図 4 - 5 運動部・スポーツクラブ所属の有無別新体カテストの合計点 (男子)

(注) 図 4 - 1 の (注) に同じ。

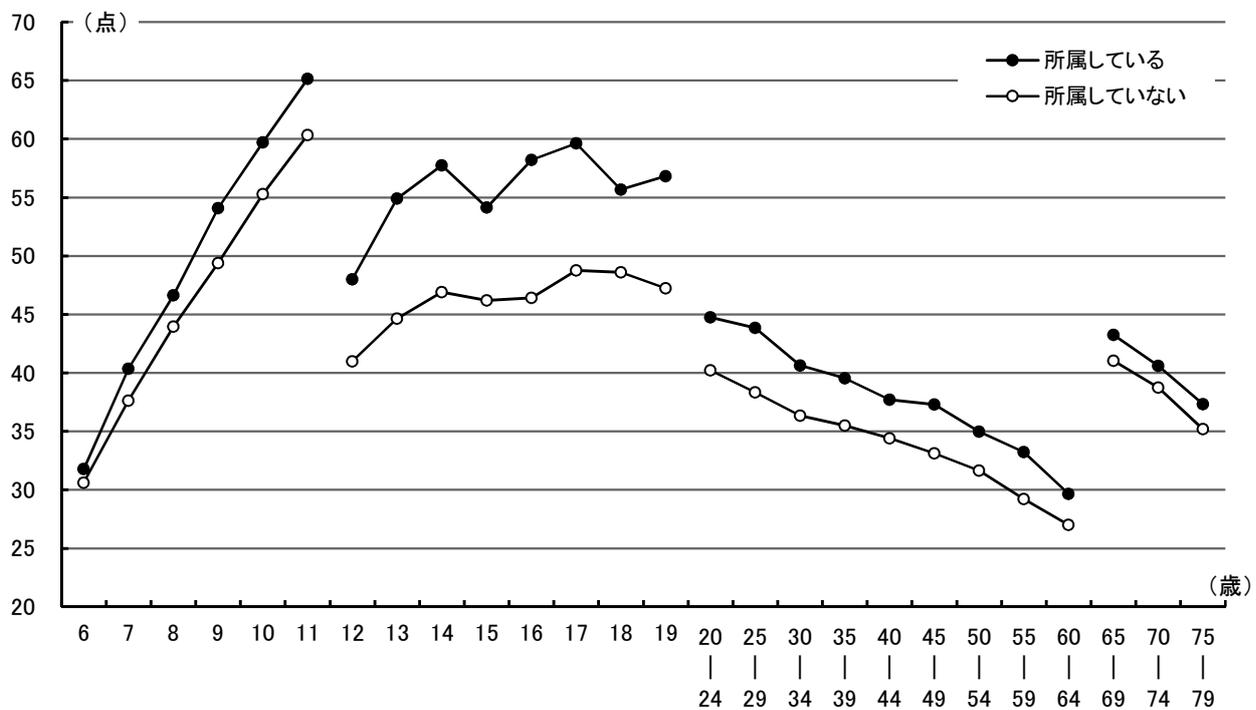


図 4 - 6 運動部・スポーツクラブ所属の有無別新体カテストの合計点 (女子)

(注) 図 4 - 1 の (注) に同じ。

(4) 未就学時期の外遊びの実施状況と体力

小学校入学前の外遊びの実施状況と6～11歳の新体力テストの合計点との関係を、図4-7（男子）及び図4-8（女子）に示した。

合計点は、男女ともに小学校入学前の外遊びの実施状況にかかわらず、加齢に伴いほぼ同様に上昇する傾向にある。しかし、小学校入学前に「週に6日以上」または「週に4～5日」外で体を動かさず遊びをしていた群は、「週に2～3日」以下の群より、いずれの年代においても高い値を示している。

したがって、小学校入学前の外遊びの実施状況が、その後の運動・スポーツ習慣につながり、高い水準の体力を維持する要因の一つになっていると考えられる。

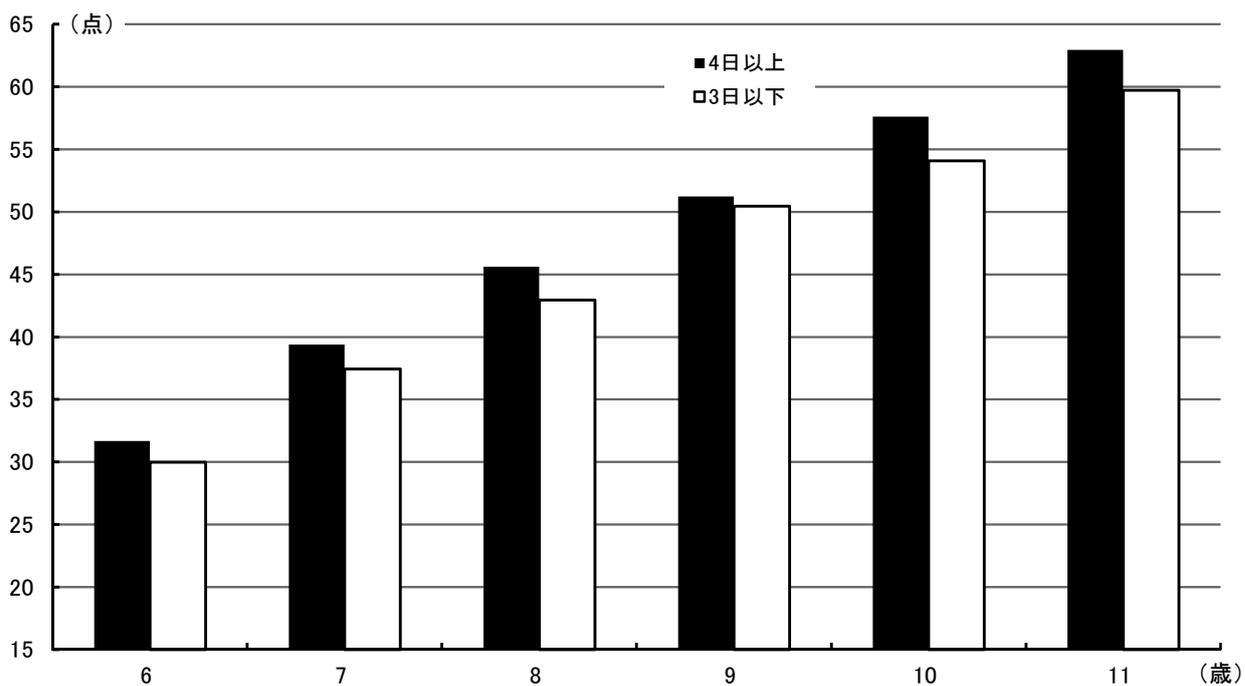


図 4 - 7 小学校入学前の外遊びの実施状況別新体力テストの合計点 (男子)

(注) 1. 「4日以上」は、小学校入学前に外で体を動かす遊びを「週に6日以上」または「週に4-5日」していた群を、「3日以下」は、「週に2~3日」「週に1日以下」していた群を示す。

2. 合計点は、新体力テスト実施要項の「項目別得点表」による。

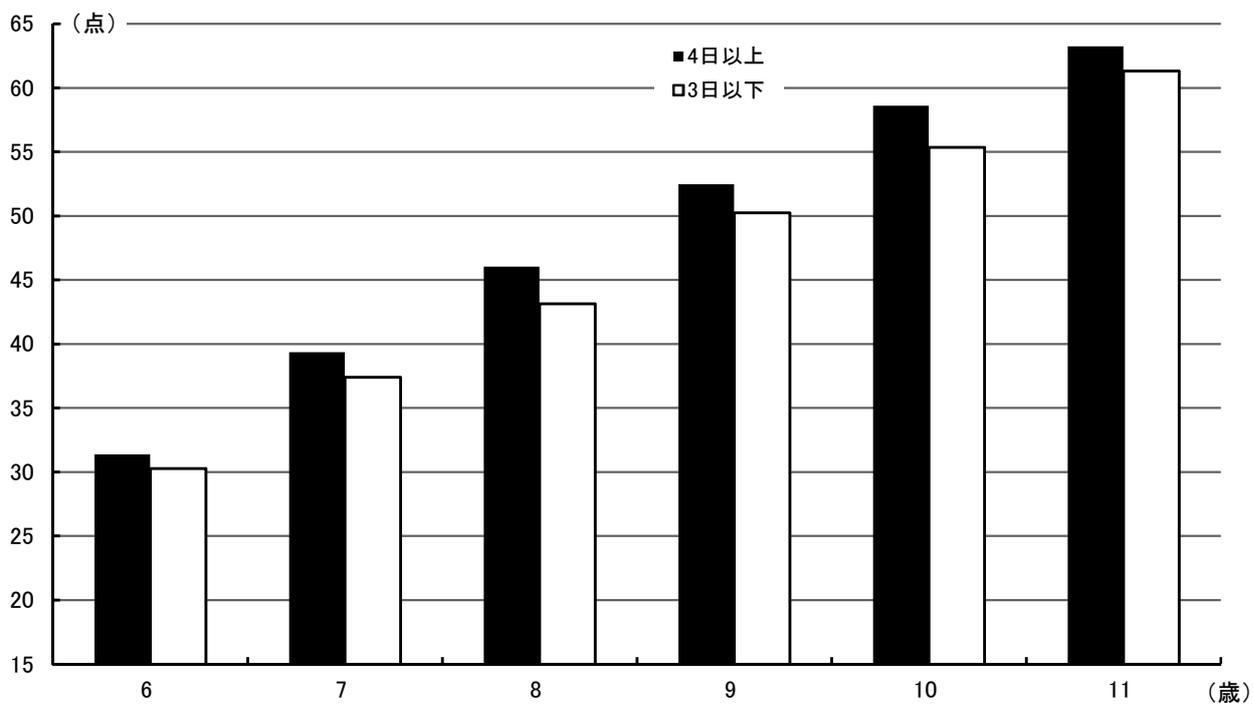


図 4 - 8 小学校入学前の外遊びの実施状況別新体力テストの合計点 (女子)

(注) 図 4 - 7 の (注) に同じ。

(5) 学校時代の運動部（クラブ）活動の経験と体力

中学校，高等学校，大学のいずれかでの運動部（クラブ）活動の経験の有無と，20～64歳及び65～79歳の新体力テストの合計点との関係を，図4-9（男子）及び図4-10（女子）に示した。

合計点は，男女ともに運動部（クラブ）活動の経験の有無にかかわらず，加齢に伴いほぼ同様に低下する傾向にある。しかし，中学校，高等学校，大学のいずれかで運動部（クラブ）活動を経験した群の合計点は，75～79歳男子を除き，運動部活動の経験のない群より，いずれの年代においても高い値を示している。

したがって，学校時代の運動部（クラブ）活動での経験が，その後の運動・スポーツ習慣につながり，生涯にわたって高い水準の体力を維持する要因の一つになっていると考えられる。

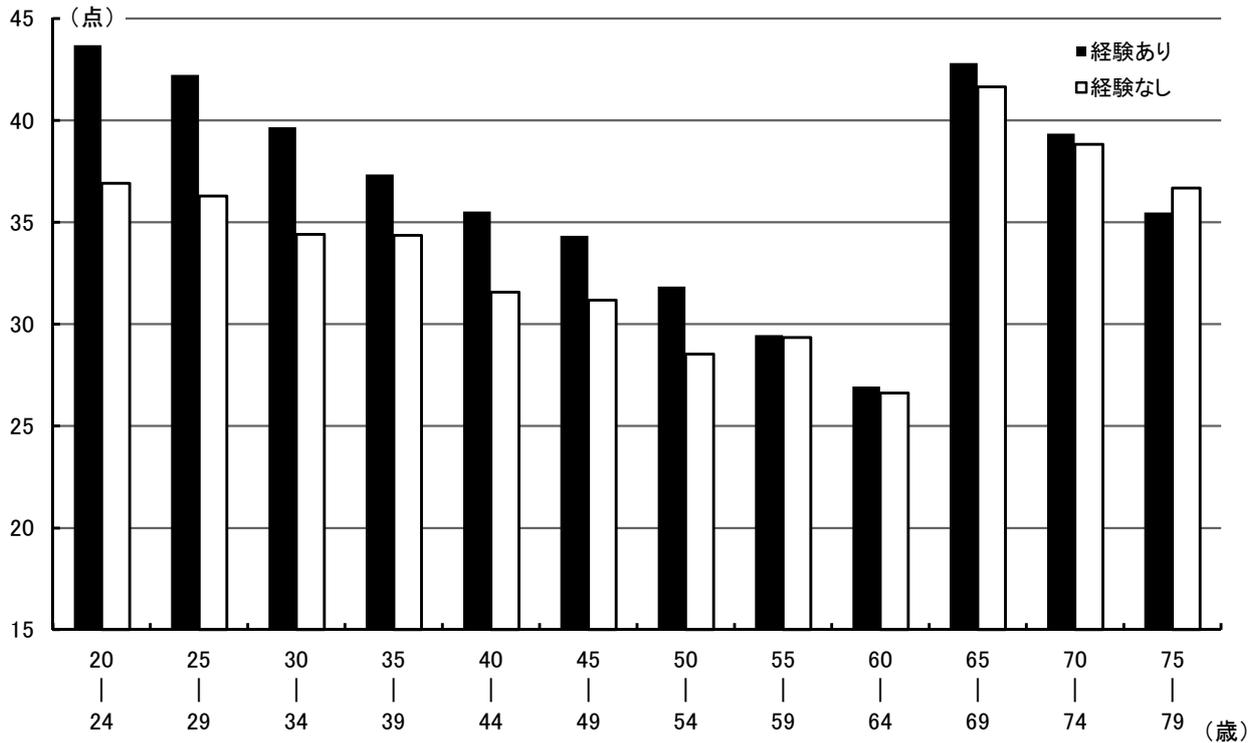


図 4-9 学校時代の運動部（クラブ）活動の経験別新体カテストの合計点（男子）

- (注) 1. 「経験あり」は、中学・高校・大学のいずれかにおいて運動部（クラブ）活動の経験がある群を示す。
 2. 合計点は、新体カテスト実施要項の「項目別得点表」による。
 3. 得点基準は、20～64歳、65～79歳で異なる。

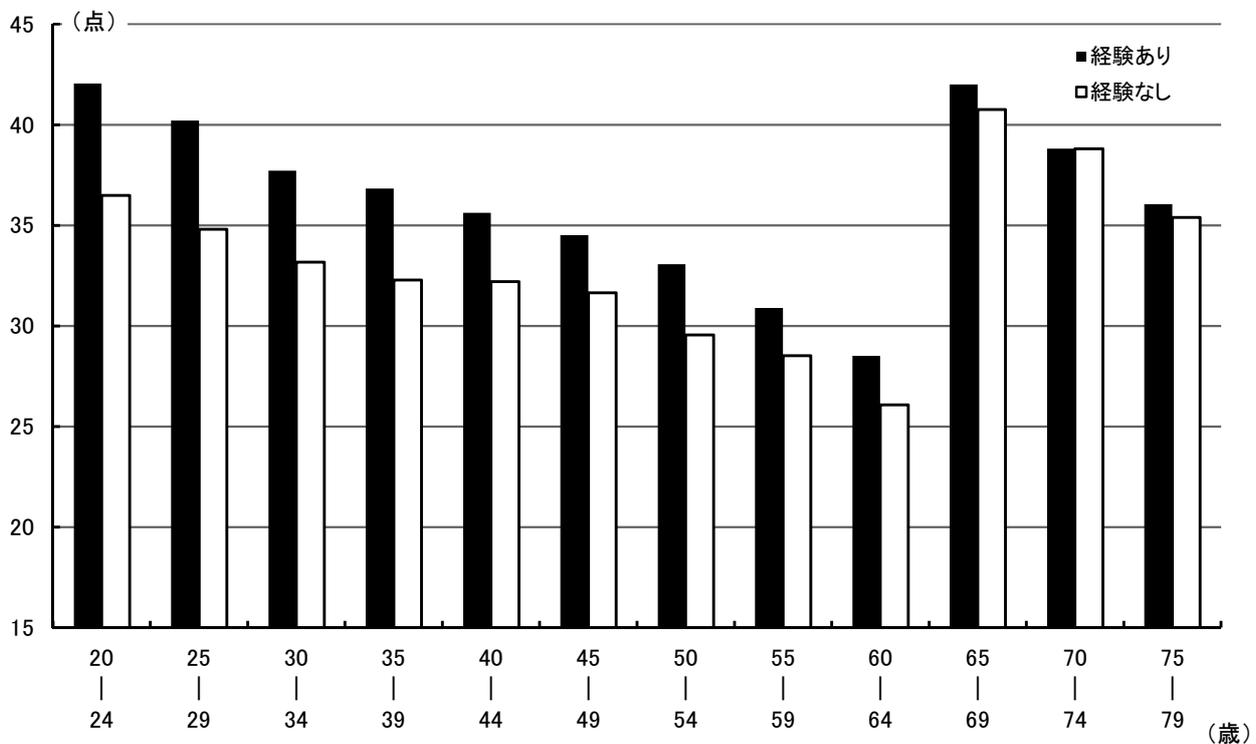


図 4-10 学校時代の運動部（クラブ）活動の経験別新体カテストの合計点（女子）

- (注) 図 4-9 の (注) に同じ。

5 健康・体力に関する意識と体力

(1) 健康状態に関する意識

20～64 歳及び 65～79 歳の健康状態に関する意識と、新体力テストの合計点との関係を、図 5-1 に示した。

男女とも、合計点は 20～24 歳をピークに加齢とともに減少する。また、全ての年代において、健康状態について、「大いに健康」と意識する群の合計点が最も高く、「まあ健康」と意識する群がそれより 1～3 点低い値、「あまり健康でない」と意識する群がさらに 2～5 点低い値となっている。

20～79 歳における健康状態に関する意識と運動・スポーツの実施頻度との関係を図 5-2 に示した。

「ほとんど毎日」又は「ときどき」運動をしている者の割合は、「大いに健康」と意識する群の男子で約 70%，女子で約 60 % である。一方、「まあ健康」と意識する群では男子で約 55%，女子で約 50% であり、「あまり健康でない」と意識する群では男女とも約 30% となっている。

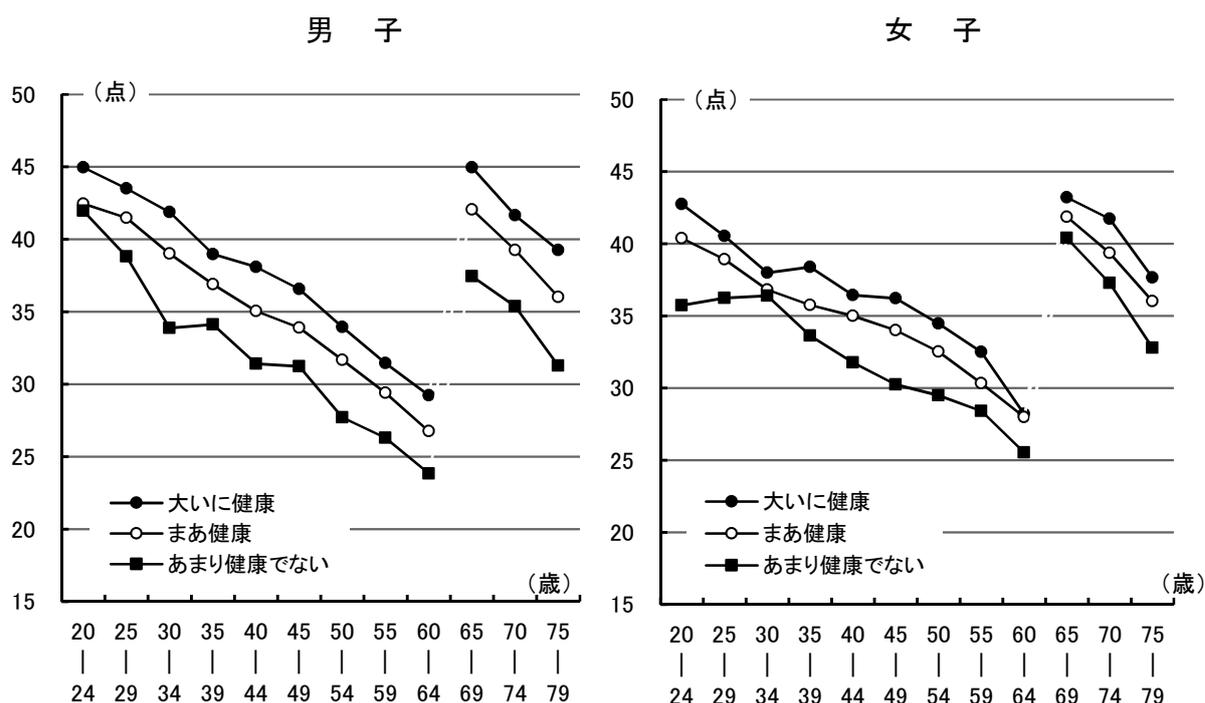
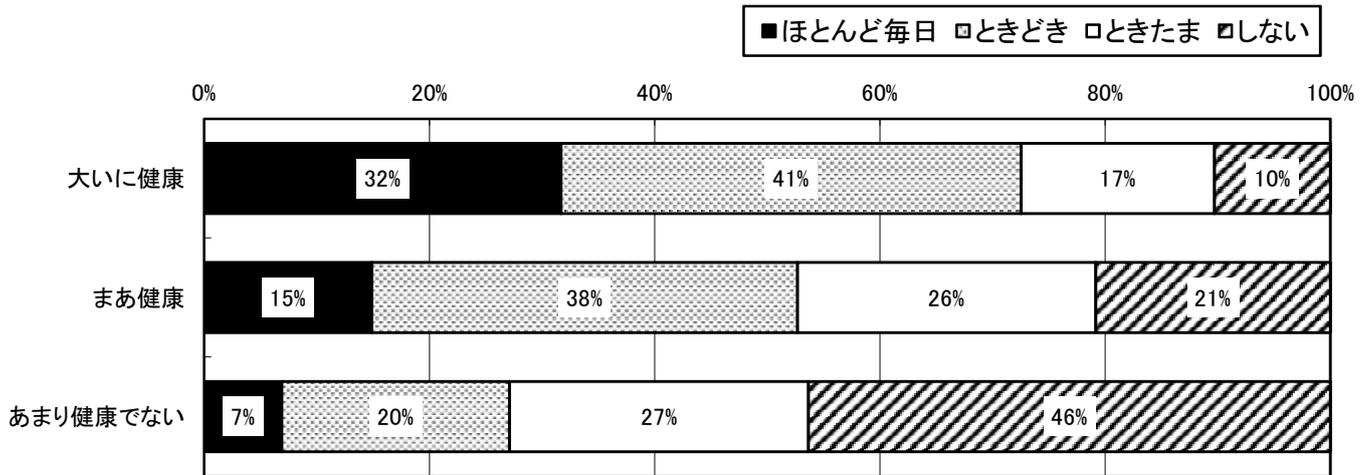


図 5-1 健康状態に関する意識別新体力テストの合計点

(注) 1. 合計点は、新体力テスト実施要項の「項目別得点表」による。
2. 得点基準は、20～64 歳、65～79 歳及び男女により異なる。

男子



女子

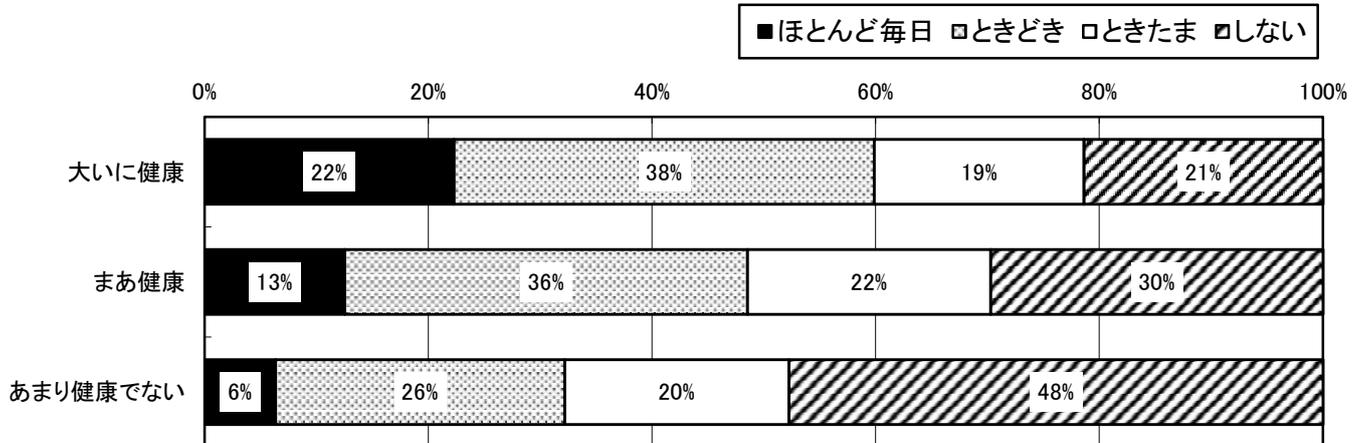


図 5 - 2 健康状態に関する意識別運動・スポーツの実施頻度

(注) 1. ほとんど毎日：週 3～4 日以上，ときどき：週 1～2 日程度，ときたま：月 1～3 日程度
 2. % 数値は，小数点以下第 1 位を四捨五入して表記してある。

(2) 体力に関する意識

20～64歳及び65～79歳の体力に関する意識と、新体力テストの合計点との関係を、図5-3に示した。

合計点は、男女とも20～24歳をピークに加齢とともに減少し、特に45～49歳以降に低下の度合いが大きくなっている。また、全ての年代において、体力について「自信がある」と意識する群の合計点が最も高く、「普通である」と意識する群がそれより3～6点低い値、「不安がある」と意識する群がさらに3～7点低い値となっている。

20～79歳における体力に関する意識と運動・スポーツの実施頻度との関係を図5-4に示した。

「ほとんど毎日」又は「ときどき」運動をしている者の割合は、「自信がある」と意識する群で男女とも約85%である。一方、「普通である」と意識する群では男女とも約55%であり、「不安がある」と意識する群では男女ともに約25%となっている。

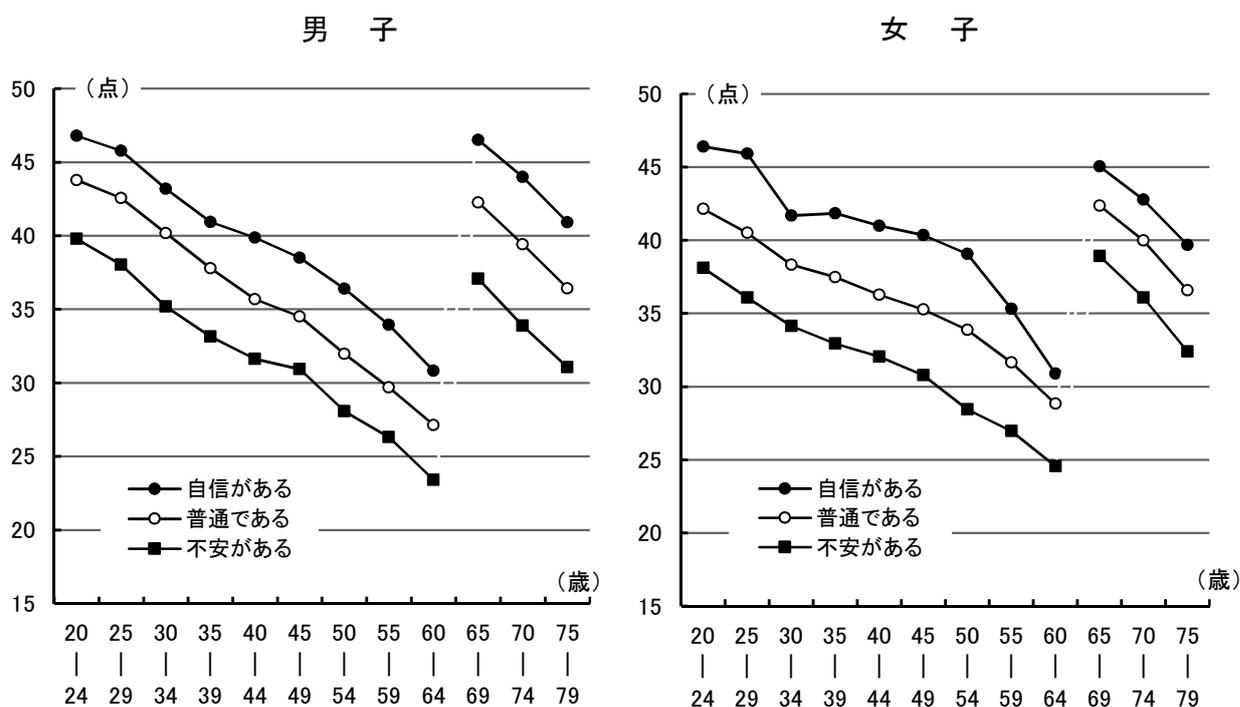
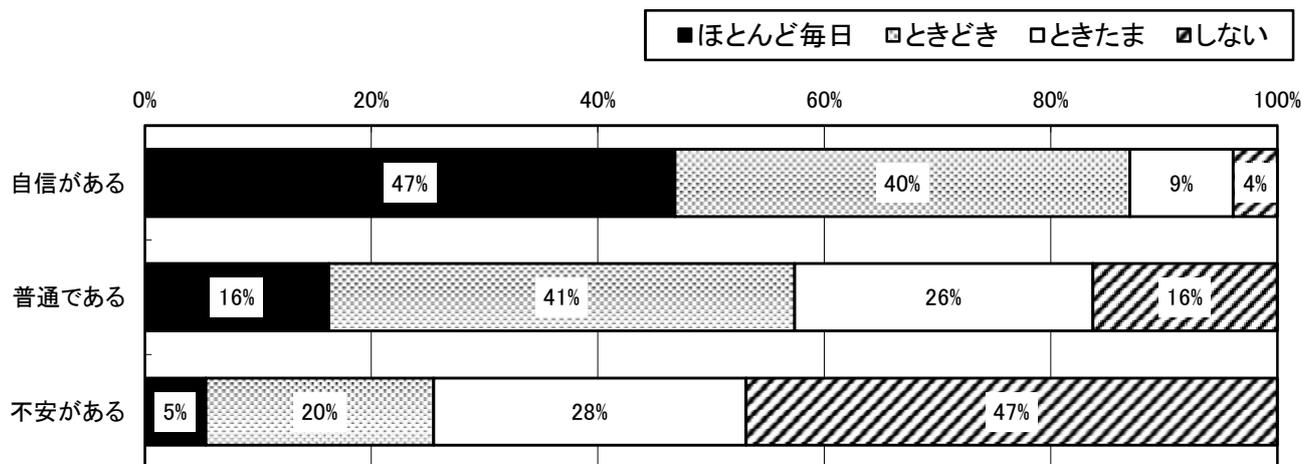


図5-3 体力に関する意識別新体力テストの合計点

(注) 図5-1の(注)に同じ。

男子



女子

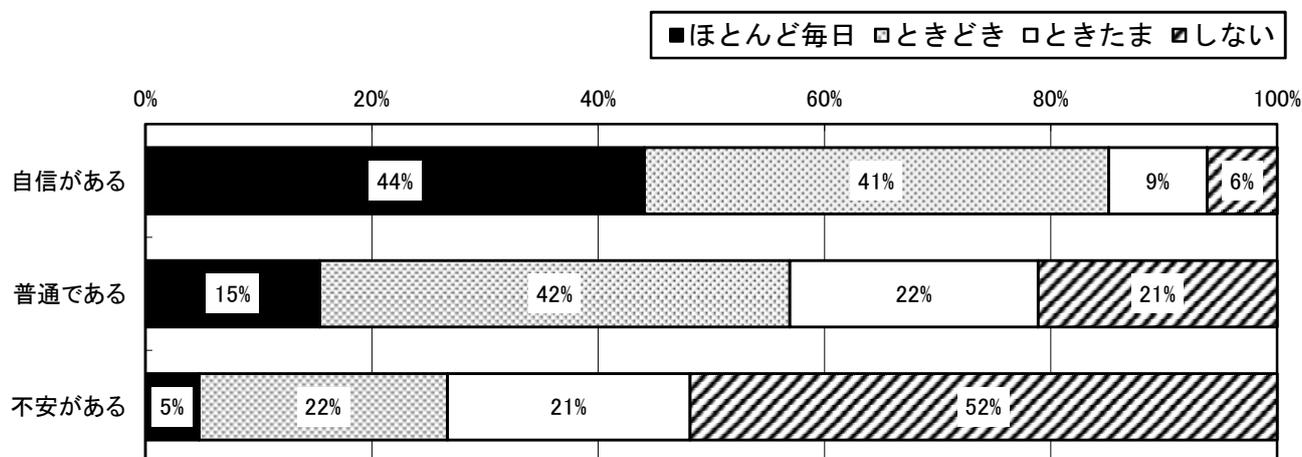


図 5 - 4 体力に関する意識別運動・スポーツの実施頻度

(注) 図 5 - 2 の (注) に同じ